取り組みのシナリオ集

東山官衙遺跡、南門から見た風景

なりわい

- 地域資源を活かしたにぎわいの景観
- 観光の拠点づくり
- まちのなりわい発信局
- 加工体験を通した食育のすすめ
- 里山暮らしＰＲ委員会
- 市民農園による宮崎のファンづくり

シナリオ 01 地域資源を活かしたにぎわいの景観

1. 取り組みの流れ

萌芽期

にぎわいのきっかけづくり

「まちあるき」の企画

地域住民と商店主で住民組織を結成し、商店街全体を歩く「まちあるき」の企画をします。その際は、町などが協力をして商店街の中心部にある住民バスセンターなどを拠点として確保します。

「まちあるき」の開催

チラシやホームページなどで参加者を募集し、地域住民等が案内役としてまちあるきを開催します。また、地域の子どもたちにも地域に関心を持っていただくため、小中学校にも参加を呼びかけます。

「魅力マップ」づくり

「まちあるき」参加者を誘って住民バスセンターなどに集まり、「まちあるき」を通じて発見した商店街の特徴的な場所などをまとめる「魅力マップ」づくりのワークショップを行います。また、「まちあるき」参加者には、まちあるきや魅力マップづくりを行う住民組織への加入をお願いします。

「魅力マップ」の充実

「まちあるき」とワークショップを繰り返しながら「魅力マップ」を充実していきます。

成長期

恒常的なにぎわいづくり

ユニークな看板コンクールの開催

先に結成した住民組織は、魅力マップの場所などを案内するための看板をつくるため、ユニークな看板のデザインを募集します。

ユニークな看板づくり

上記のコンクールで採用されたデザインの看板を製作します。町は、看板の製作や設置に関して協力をします。

自転車のレンタルサービス等の企画

先の住民組織は、商店街全体を快適で自由に動き回れるように、自転車のレンタルサービスなどについて検討します。

円熟期

まちの顔づくり

ランドマーク候補の募集・検討

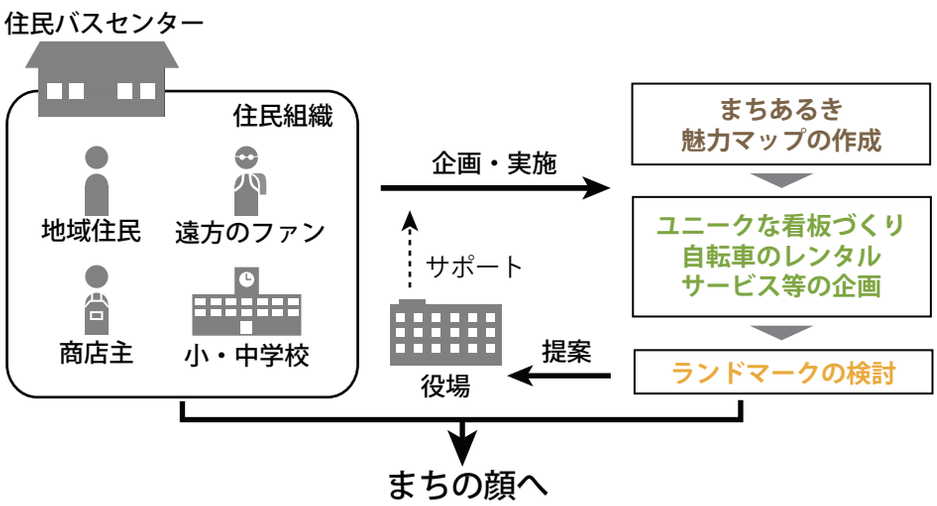
商店街を歩く人が増え、まちの景観が変わってきたら、まちのランドマークとなる建物の整備について検討します。持ち主が自発的に「この建物を使ってほしい」という申し出があるのが好ましいので、積極的に情報発信をする必要があります。この建物は、地域のコミュニティの核となる機能を持たせます。検討された結果については町に提案します。

ランドマークの整備

町は、提案を受けたらランドマークとなる建物の整備をします。

加美町の各地域の商店街では、お客さんの減少や後継者問題が深刻化し、なりわいが安定しない現状にあります。この取り組みでは、中新田商店街を中心として、商店街の資源を生かしながら恒常的なにぎわいを創出し、まちの顔となるランドマークの整備を行います。なお、中新田では、商店街の「にぎわいづくり委員会」を中心にすでに活動が始まっています。

2. 取り組みの体制



中新田の地域の住民や商店主で住民組織を結成します。そして、「まちあるき」などを通じて町内外の方にも組織に加入していただきメンバーを増やしていきます。活動の拠点は、商店街の中心部にある住民バスセンターとします。町は、この住民組織の活動をサポートします。

3. その他の地区への応用

case 0 1　小野田

小野田には、薬莱地区に多くの観光客が訪れていますが、商店街がその通過地点にあるため、薬莱地区への観光客を対象とした同様の取り組みが考えられます。

case 0 2　宮崎

宮崎には、商店街の中心部にまちづくりセンターがあるので、そこがランドマークとなり活動拠点として同様の取り組みが考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

寄り道が楽しくなるようなまち

寄り道が楽しくなるような場所が欲しいという意見がありました。そのためにまちの魅力を伝えていくような看板やマップをつくっていけば歩くことが楽しくなるのではないかという意見に発展しました。

気軽に巡れるまち

徒歩で歩くには広すぎるという意見がありました。そこで自転車を所持していないような人々でも自由に町内を巡れるようなシステムが欲しいという意見から「レンタルサービス」というアイディアに発展しました。

● 萌芽期　● 成長期

シナリオ 02 観光の拠点づくり

1. 取り組みの流れ

萌芽期

観光拠点と資源の発掘

観光拠点の発掘

シナリオ１の地域住民と商店主などで構成する住民組織が実施する「まちあるき」を通じて、観光拠点の場所の候補や機能について話し合います。また、空き家・空き店舗の所有者で、使われていない場所を活用したい人がいれば、観光拠点としての利活用を共に考えていきます。

観光資源（人）の発掘

住民組織は上記活動の中において、観光拠点で機能を担う人についても発掘していきます。

成長期

観光プログラムの作成

観光プログラムの検討

先の住民組織は、拠点となる場所と機能を担う人が決まったら、そこで提供する「名物」やそれをよそう「器」、酒や食べ物など各店が持つ「情報」と販売する「お土産」など、地域全体が関わるような観光プログラムについて検討します。また、観光プログラムは「火伏の虎舞」や「うめえがすと鍋なつり」、「花楽市」などのイベントとも連動するようにします。

観光拠点の運営組織の発足

先の住民組織を中心に、拠点を運営していく担い手についても検討し、立ち上げまで行います。

円熟期

観光拠点づくり

観光拠点の整備

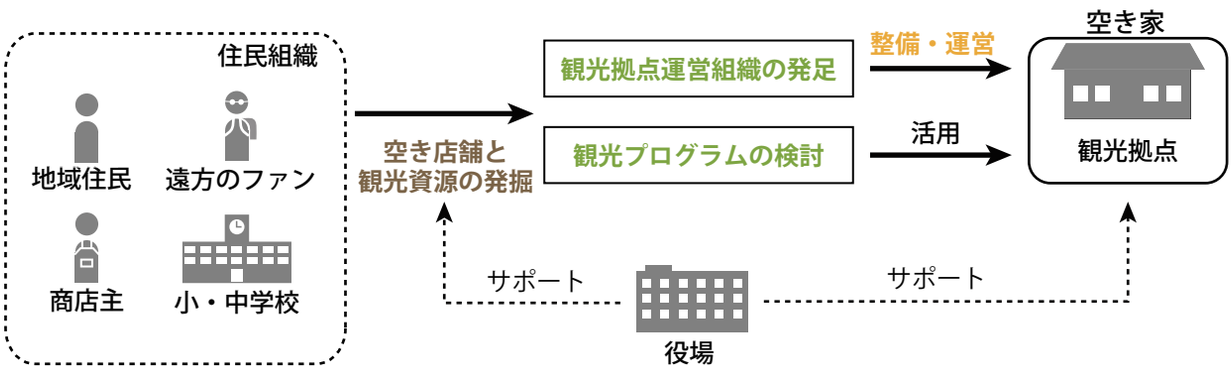
観光プログラムが完成したら、住民組織は観光拠点となる空き家・空き店舗の改修を行います。その際、町は費用の助成など必要な支援を行います。

拠点づくりの手引き作成

住民組織は、観光拠点が完成するまでの流れを「拠点づくりの手引き」にまとめ、新たな観光拠点づくりの際に活かします。

どこの地域でも住民の活動拠点となり、まちづくりを促す地域の活動拠点が求められています。この取り組みでは、中新田商店街を中心に観光拠点をつくり、地域の人が食事やお土産などを提供します。シナリオ１と同様、中新田ではすでに「にぎわいづくり委員会」が活動を進めています。

2. 取り組みの体制



成長期までは、シナリオ１同様の商店主を中心とした住民組織を中心に活動していきます。成長期で運営組織が立ち上げられたら、この組織が中心となり円熟期に向けて活動します。

3. その他の地区への応用

case０１　小野田

小野田は、薬莱地区に多くの観光客が訪れているので、薬莱地区での観光プログラムの活用について考えられます。

case０２　宮崎

宮崎には、商店街の中心部にまちづくりセンターがあるので、そこを観光拠点として同様の取り組みが考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

町内に点在する空き家

使われていない空き家が町内に多く点在し、それが景観に表れることでまちににぎわいがなくなっているという意見がありました。そこで、まちの空き家を拠点として活用していきたいというアイディアに発展しました。

イベントとの連携

イベントがあるにも関わらず、地元産業との連携があまりとれていないという意見がありました。現在商店街で行われている虎舞や鍋まつりなどと連携していくと良いという提案もありました。

● 萌芽期　● 成長期

シナリオ 09 まちのなりわい発信局

1. 取り組みの流れ

萌芽期

加美町農業カレンダーづくり

カレンダー掲載人物への取材

地域住民や農家で「なりわい発信局」を組織し、農家やさんちゃん会、農業団体などにカレンダーに掲載する農家を紹介していただき取材します。

カレンダーの編集

「なりわい発信局」は、取材した内容をもとにカレンダーの編集をします。

カレンダーの発行

「なりわい発信局」は、カレンダーを発行し町内に配布します。その際、町は発行に必要な費用の支援をするほか、ベストスマイリスト賞を授与するなどして取り組みを評価します。

成長期

インターネットを活用した情報発信

若者による取材活動

「なりわい発信局」は、地域の小学校や中学校、高校と連携して取材活動を行います。児童や生徒がクラブ活動などで農家を取材し、「なりわい発信局」はその情報を整理します。

インターネットを活用した情報発信

「なりわい発信局」は、町外へもなりわいの情報を発信するため、インターネットを活用して毎週情報を公開します。

円熟期

体験番組づくりと発信

番組用の農地と出演者の募集

「なりわい発信局」は、実際に加美町の農地でイケメンやイケジョなどが農作物を栽培する過程を紹介しながら魅力を伝えるため、その農地や出演者を募集し決定します。また、農作物の栽培スケジュールや番組の内容について検討します。

出演者による農作物の栽培と撮影

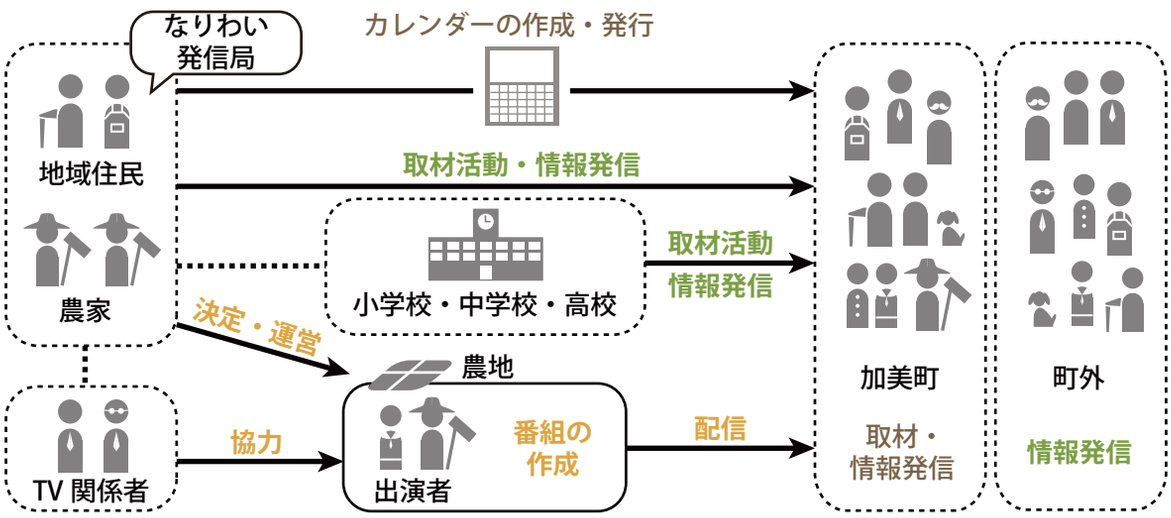
「なりわい発信局」は、出演者に農地で農作物を栽培体験していただき、その様子を撮影し編集します。

テレビやインターネットによる情報発信

撮影した番組を週に１回程度テレビやインターネットを通じて放送します。また、小野田の田植踊りなど地域の文化なども紹介することで、加美町の魅力を発信していきます。

加美町の魅力を、なりわいを支えている住民を紹介しながら町内外へ発信します。この取り組みでは、小野田の農家を中心に農業カレンダーを作成するほか、若者によりテレビやインターネットも活用して加美町の魅力を発信していきます。

2. 取り組みの体制



小野田の地域の住民や農家で「なりわい発信局」を組織します。成長期では地域の小・中学校や高校とも連携して取材活動を行います。テレビを通じた情報発信ではテレビ関係者の協力も必要となります。

3. その他の地区への応用

case　中新田　宮崎

この取り組みは、地域の区別なく進めることができます。組織も地域の隔たりがないものとすれば、町内の農家を対象としたカレンダーを作ることができます。さらに情報もまとまったものを発信することができます。

■ワークショップで出たアイディア

学校と連携し、活動を拡げる

高校生の地域クラブなどに委託し、ネット上に情報を公開してもらうことも可能ではないかという意見がありました。また、学校と連携することにより、広報が行いやすくなるだけでなく、中学の職業体験の一部を使って農業・工業の職業体験ツアーも行うことができるというアイディアが出てきました。

番組の出演者に工夫をする

農地を舞台とした農業についての番組では、イケメン、イケジョ、もしくはかみ～ごなどアイドル性のある人を起用したい、という意見がありました。また、失敗の多い人に農作業を任せた方が、周囲の住民からのサポートが得られやすいのではないか、という意見もありました。

● 成長期　● 円熟期

シナリオ10 加工体験を通した食育のすすめ

1. 取り組みの流れ

萌芽期

体験プログラムの充実と情報発信

体験プログラムの充実

「加美町グリーン・ツーリズム推進会議」が農業体験などの受け入れを実施しているので、情報の発信と受け入れを一本化にして効率的に取り組むこととします。そして、現在の体験プログラムを、町内の子どもが気軽に体験できるように、メニューと受け入れ農家の充実を図ります。

情報の発信

「加美町グリーン・ツーリズム推進会議」は、農業体験プログラム情報をチラシやインターネットを通じて発信します。その際には、農家民宿の情報も併せて発信することとし、なりわいだけでなく暮らしも体験できることを加えます。

成長期

食を知るためのきっかけづくり

体験プログラムの実施

「加美町グリーン・ツーリズム推進会議」が受付窓口、農家が体験受け入れを行うこととして、１００円でできるバターづくりなど、子どもでも気軽になりわいを体験できるプログラムで、加美町の食に興味を持てるようなきっかけづくりを行います。

学校給食への食材供給

学校給食における地産地消の推進は既に取り組まれていますが、農協や各種団体、学校の連携により計画的な食材供給体制を構築し、食育を推進します。

円熟期

食育の定着

食を通じた世代間交流

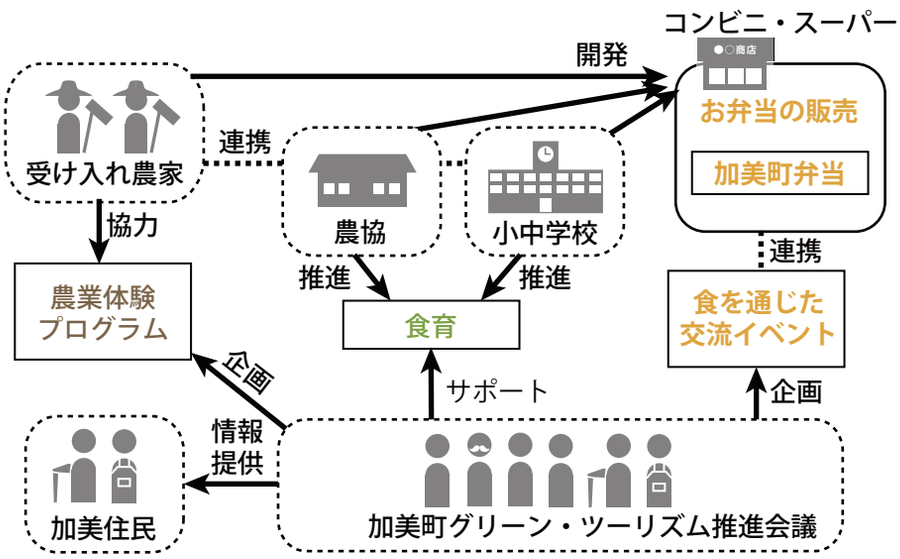
「加美町グリーン・ツーリズム推進会議」は、加美町の食文化を受け継いでいる大人と、食に関心を持ち始めた子どもが参加する料理教室などを開催して、子どもが食に対してさらに理解を深めるとともに多世代の交流を図ります。

加美町弁当の開発

農協や各種団体、学校の連携により、加美町産の食材と食文化を活かした弁当を開発し、スーパーやコンビニなどで販売します。

加美町の子どもは町内の食と農に触れ合い、学ぶ機会が少ないという課題があります。この取り組みでは、小野田において、子どもを中心に食と農を楽しく学べるような場を農家や学校の方々と協力してつくり、加美町の食を後世に伝え、さらに町外へも発信していく仕組みをつくります。

2. 取り組みの体制



農業体験や料理教室などの企画・実施は、加美町グリーン・ツーリズム推進会議を主体に行います。学校給食への食材供給や加美町弁当の開発などは、農協や各種団体、学校が連携して行います。

3. その他の地区への応用

case　　中新田　宮崎

この取り組みは、地域の区別なく進めることができます。加美町グリーン・ツーリズム推進会議も活動の範囲が町内全域であり、農協も加美郡全域であるため、その地域に合った農産物や加工体験などがで実施することができます。

■ワークショップで出たアイディア

加工体験・食育の場としての学校

食育を進めていく上で、小中学校と普段から連携をしていく必要があるという意見がありました。この意見の裏には、子どもの頃に食べた給食が地域の食への興味創出のきっかけとなったというものがありました。

加工体験を通した食育

味噌や漬け物、ソーセージ、バター、アイスクリームなどの加工食品を自らの手で作る体験によって、農畜産業に興味が生まれるという意見がありました。そこから、「100 円でできるバター作り」のような子ども向きの取り組みの案が出てきました。

● 成長期　● 円熟期

シナリオ 15 里山暮らしＰＲ委員会

1. 取り組みの流れ

萌芽期

里山暮らしＰＲ委員会の発足

委員の募集

宮崎の有志で、里山暮らしの魅力を伝える組織を立ち上げるため、里山暮らしについて詳しい人などを募集します。また、今まで気づかなかった地域の魅力を発掘するため、Ｕターンした人も募集します。

委員会の発足

応募のあった人たちで「里山暮らしＰＲ委員会」を発足し、役割や活動内容について検討します。その際は、商店街の中心部にあるまちづくりセンターを活動の拠点とします。

成長期

PR 情報の発信

里山暮らしのＰＲ内容の検討

「里山暮らしＰＲ委員会」は、里山暮らしの魅力の発掘とそれを体験できるプログラムやサービスなどについて検討します。商店街にぎわいづくり委員会作成の「みどころマップ」も活用していきます。

関係者による役割分担

「里山暮らしＰＲ委員会」は、体験やサービスを提供できる農家などと協議を行い、受け入れ体制を構築します。

里山暮らし体験情報等の発信

「里山暮らしＰＲ委員会」は、インターネットなどを活用して体験プログラムの情報などを発信します。

円熟期

里山暮らしの体験

食の提供や体験の受け入れ

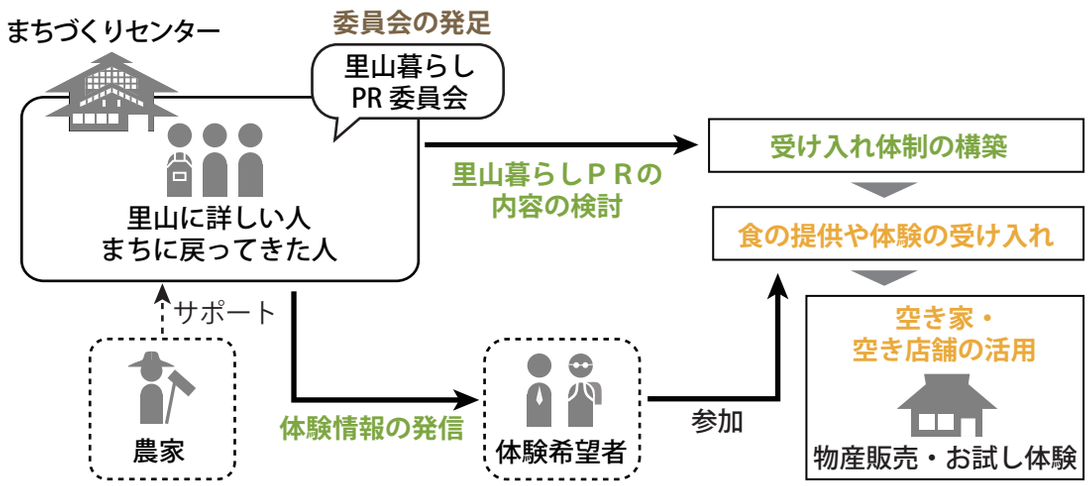
農家の方たちで、まちづくりセンターを拠点に「切込焼 × 食」や「自然 × 食」などをテーマにした食事の提供や体験の受け入れを行います。

空き家・空き店舗の活用

里山暮らしのファンが定着してきたら、地域にある空き家・空き店舗も活用して食の提供や物産販売を行うとともに、里山暮らしのお試し体験もできるようにします。その際には、町は空き家・空き店舗の改修費用の助成などの支援を行います。

里山の資源を有効に活用できていない状況にあります。この取り組みでは、宮崎の里山暮らしの魅力をＵターンした人を中心に発掘し、情報発信をしながら地域にお客さんを呼び込み、食の提供や体験の受け入れなどを行っていきます。

2. 取り組みの体制



Ｕターンした人や若者を中心とした「里山暮らしＰＲ委員会」を組織します。そして、まちづくりセンターを拠点に里山暮らしの魅力情報を発信していきます。地域に訪れたお客さんの対応は、農家の方たちが担います。

3. その他の地区への応用

case ０１　中新田

中新田には酒蔵などがあるので、日本酒や蔵などを活用した活動が考えられます。

case０２　小野田

小野田は、薬莱地区に多くの観光客が訪れています。里山暮らしの魅力情報を併せて発信することで、里山に興味のある方も薬莱地区に呼び込むようにすることが考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

拠点となるまちづくりセンター

まちづくりセンターを拠点として、体験の受け入れや情報発信を行うという意見がありました。

宮崎公民館と居酒屋

「里山暮らしＰＲ委員会」の会合を開催する際に、真面目な会合を公民館で、きっかけづくりや懇親会は居酒屋で行うという意見がありました。

空き家をアンテナショップ化

宮崎のお米や野菜等といった「食」、「切込焼」をブランド化して販売する為のアンテナショップを、近年増加している商店街の空き家を利用して実現するという提案がありました。

● 萌芽期　● 成長期　● 円熟期

シナリオ16 市民農園による宮崎のファンづくり

1. 取り組みの流れ

萌芽期

市民農園の確保

市民農園管理・運営組織の発足

宮崎の有志で、農地を貸して指導・管理できる農家を募集し、市民農園の管理・運営組織を発足します。そして、市民農園として貸し出しできる農地をリスト化します。貸し農地の充実化を図るため、貸し出しだけを希望する農家の農地でも可とします。

市民農園運営のルールづくり

市民農園管理・運営組織のメンバーで、市民農園における指導方法や管理方法、料金、参加者のルールなどについて協議します。

成長期

市民農園の実施

利用者の募集

シナリオ１０の「加美町グリーン・ツーリズム推進会議」、またはシナリオ１５の「里山暮らしＰＲ委員会」と連携し、市民農園の利用者を募集します。

市民農園の貸し出し

利用者の希望に応じて作物の種類や作業の内容は異なりますが、農家と利用者の交流が積極的に図られるようにします。

円熟期

交流の拡大

農家との交流

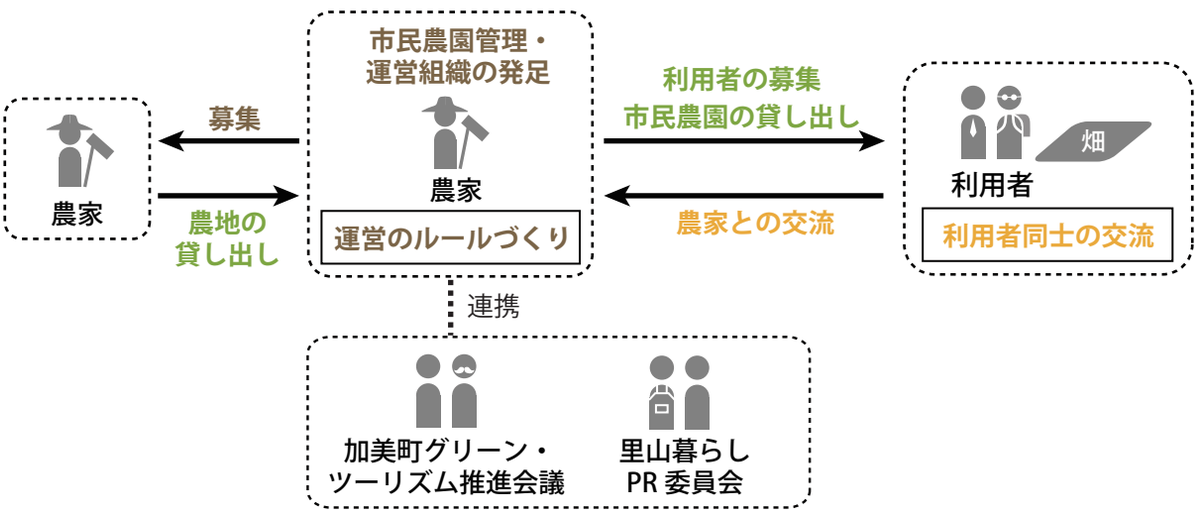
農家と利用者の付き合いが長くなってきたら、農業体験だけでなく、農家において加工体験や生活体験ができるようにします。

利用者同士の交流

市民農園が定着してきたら、初期の利用者が知人を連れて作業をしたり、新規利用者に指導をするなど利用者同士の交流も図るようにします。

町内には活用されなくなった農地が増えつつあります。一方で、都市部の住民は農村での農業体験などに興味を持つ人が増えております。この取り組みでは、宮崎の遊休農地を市民農園として有効活用を図りながら都市部のファンづくりを行います。

2. 取り組みの体制



農家による管理・運営組織を発足し、利用申し込みの窓口から指導までを担います。情報の発信は、単独より他の魅力情報との発信の方が有効であるため、加美町グリーン・ツーリズム推進会議や里山暮らしPR 委員会などと連携します。

3. その他の地区への応用

case 01　中新田

中新田は、仙台方面からのアクセスも良いため、同様の取り組みが考えられます。

case 02　小野田

小野田では、薬莱地区で既に団体により実施されていますが、地域内には遊休農地が存在するため、同様の取り組みが考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

市民農園の管理・運営の拠点

市民農園の管理･運営組織として「JA 加美よつば宮崎支店」が市民農園の参加者の登録を担いつつ、回覧板を活用して農地の貸し出しを募集するという意見がありました。

宮崎の主要道路からのアクセス

対象範囲は、宮崎全体の里地に設定するという意見がありました。ただし、利用者の農地までのアクセスを考慮する必要性もあります。

● 萌芽期　● 円熟期

暮らし

- 外出を促す休憩処づくり
- 蔵を拠点とした食文化の伝承
- まちの名人発掘
- 多世代が集う伝承の場づくり
- ペットとともに訪れるまちへ
- 地域を巡るにぎわいづくり
- 宮崎文化祭
- 空き家を活用した芸術家の拠点づくり
- 子育て世代の環境づくり

シナリオ 03 外出を促す休憩処づくり

1. 取り組みの流れ

萌芽期

候補地の選定

空き家・空き店舗などのリスト化

町は、高齢者が外出するきっかけとなる病院や店舗、公共施設が集中する中新田の商店街の中で、休憩処の候補となる空き家や空き店舗などをリスト化します。

候補地の選定

町は、空き家や空き店舗のリストの中から、高齢者の利用が多い病院や店舗、バス停などに近いといった条件を満たす候補地を選定します。

成長期

休憩処の整備

休憩処の管理・運営体制づくり

町は、休憩処を管理・運営する組織を発足、または既存の組織に委託するなど体制づくりを行います。

休憩処の整備

町は、候補地の所有者から建物を賃借し、必要な改修を行います。

情報の発信

町と管理・運営組織は、休憩処の利用について広報紙などを通じて情報発信を行います。

円熟期

世代間交流

休憩処の運営

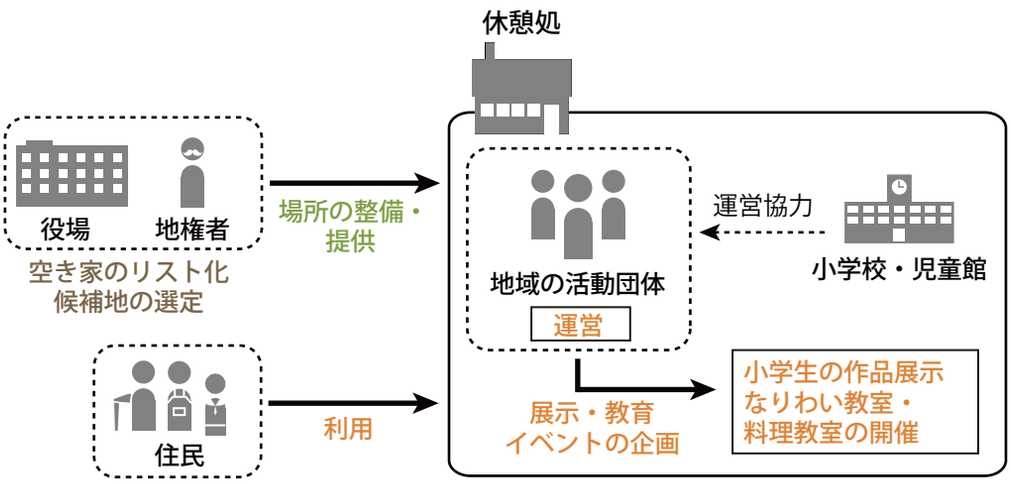
管理・運営組織により、休憩処を運営します。休憩処は、病院や買い物帰りなどの高齢者だけでなく、周辺住民も気軽に利用できるものとし、お茶や話を楽しみながら過ごせるようにします。

高齢者と子どもの交流

休憩処は、子どもも利用できるものとし、学校帰りの子どもが立ち寄り、高齢者と交流できる機会をつくります。そのために、高齢者が持つ知恵や技（綯わない、料理等）を子どもたちに教えるイベントや、子どもたちの作品展示などを行います。

住民がまちに出てお茶や話を楽しむ機会が少なくなっています。その原因としてまちに気軽に集まれる場所が少ないことがあげられます。この取り組みでは、中新田の高齢者の方々が普段利用する場所に、住民が集える休憩処を整備することで、高齢者の方々の外出を促します。

2. 取り組みの体制



休憩処の整備と費用の負担は町とし、管理・運営組織は地域の団体に委託します。また、運営にあたっては、小学校や児童館などとも連携して進めます。

3. その他の地区への応用

case 01　小野田

小野田は、中新田と条件が似ていることから、公共施設の利用も含めて同様の取り組みが考えられます。

case 02　宮崎

宮崎は、商店街の中心部にまちづくりセンターがあるので、そこを活用した同様の取り組みが考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

待ち時間の有効利用

バス停での待ち時間や、病院での待ち時間を有意義な待ち時間にしたいという意見がみられました。そこで待ち時間が発生することが多い場所を地域住民の皆で気軽に集まりお茶できる場所にしていきたいというアイディアへと発展していきました。

高齢者と子供の交流

子供と高齢者の交流の場所が少ないという意見が多数みられました。交流のきっかけづくりとなるイベントや場所が欲しいという意見からアイディアが生まれました。

● 萌芽期　● 円熟期

シナリオ04 蔵を拠点とした食文化の伝承

1. 取り組みの流れ

萌芽期

拠点の整備

拠点となる場所の選定

シナリオ１・２の地域住民と商店主などで構成する住民組織などが、中新田商店街の建物利用の実態調査を行い、拠点の選定を行います。また、現在使っていない蔵などの建物を所有しており、活用したい人がいれば、その場所も拠点の候補とします。

拠点の運営組織の発足

シナリオ２の観光拠点の運営組織など、料理が得意な住民や料理店なども加えた組織を発足します。

拠点の整備

必要であれば、運営組織は拠点となる建物の改修を行います。その際、町は費用の助成など必要な支援を行います。

成長期

拠点の運営

拠点の運営

運営組織は、拠点で料理を提供しながら食文化を地域内外に発信していきます。また、地元料理の展示やレシピの配布も行うとともに、食材や加工食品の販売なども行います。

食の市の開催

運営組織は、観光施設やイベント時などにおいても食材や加工食品の販売も行います。

円熟期

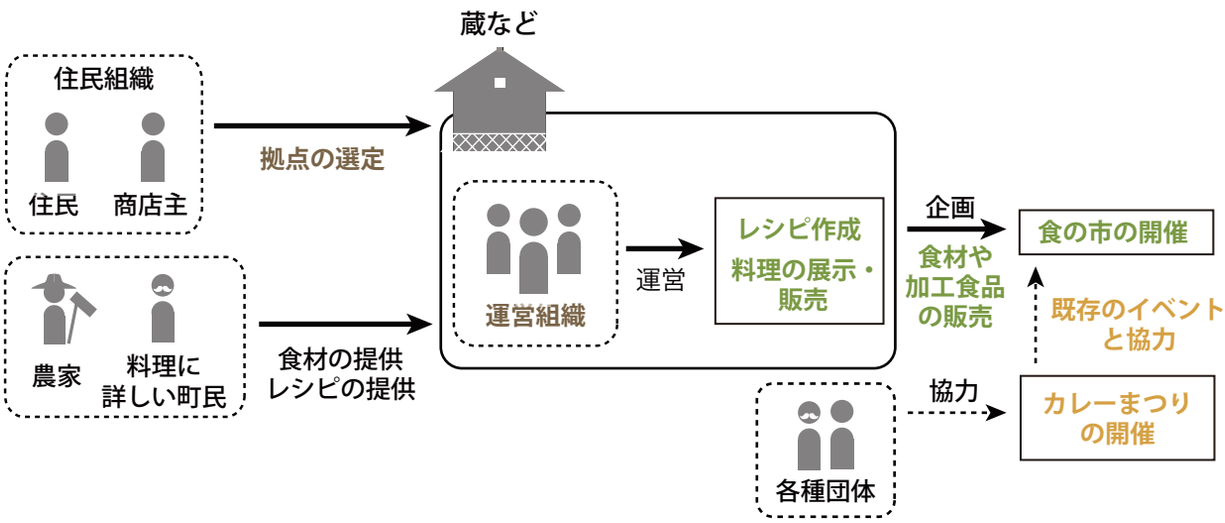
食文化発信のイベント開催

食文化発信のイベント開催

運営組織は、冬に開催されている「うめえがすと鍋まつり」に加え、町内の各種団体などにも参加を求めて「カレーまつり」を開催します。このイベントでは地域の食材を使用したカレーを振舞います。国民食となっているカレーを提供することで、子どもから高齢者までが楽しめるイベントとします。また、夜には地元の日本酒も振舞います。

地域の食文化を通じた住民同士の交流が求められています。この取り組みでは、地域でつくられた食材や各家庭に伝承された食文化を活用し、地域内外の子どもから高齢者まで楽しめる場所とイベントを開催することで、「食文化の伝承」と「食文化の創造」で世代間の交流をつくります。

2. 取り組みの体制



初期の段階では「にぎわい協力隊」などの組織が中心となり、拠点の運営組織が発足したら、この組織が中心となって活動します。イベントの開催時には、各種団体の協力も得ます。

3. その他の地区への応用

case 01　小野田

小野田は、薬莱地区に多くの観光客が訪れているので、薬莱地区で観光客向けに食文化を発信していく取り組みが考えられます。

case 02　宮崎

宮崎は、商店街の中心部にまちづくりセンターがあるので、そこを活用した同様の取り組みが考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

点在する酒蔵での食の提供

地域に点在する酒蔵は、使われていないスペースが多いという意見がありました。そこで、蔵を活用し日本酒に合う食べ物の提供や、レシピの作成をしたいというアイディアが出ました。

新しい食のイベント

食に関するイベントとして冬に「鍋まつり」だけでなく、四季それぞれで開催したいという意見がありました。

● 成長期　● 円熟期

シナリオ 05 まちの名人発掘

1. 取り組みの流れ

萌芽期

まちの名人の発掘

委員会の発足

町は、この取り組みの趣旨に賛同する住民を募集し、「まちの“技”伝承委員会」を発足します。

まちの名人の募集

「まちの“技”伝承委員会」は、住民の方々から得意な技を持っている方を募集します。その際、自薦・他薦を問わず募集するとともに、シルバー人材センターやボランティア団体にも情報提供を依頼します。

まちの名人の選考

「まちの“技”伝承委員会」は、応募または情報提供のあった中から「まちの名人」を選考します。

成長期

運営体制づくり

まちの名人リストの作成

まちの名人を選考したら、まちの名人リストを作成し冊子としてまとめます。まちの名人リストは、定期的に更新していくこととします。

運営体制づくり

名人の紹介や受付窓口、連絡調整などは「まちの“技”伝承委員会」が担うなどの運営体制を整えます。活動拠点は公民館とします。また、町は活動に必要な支援を行います。

円熟期

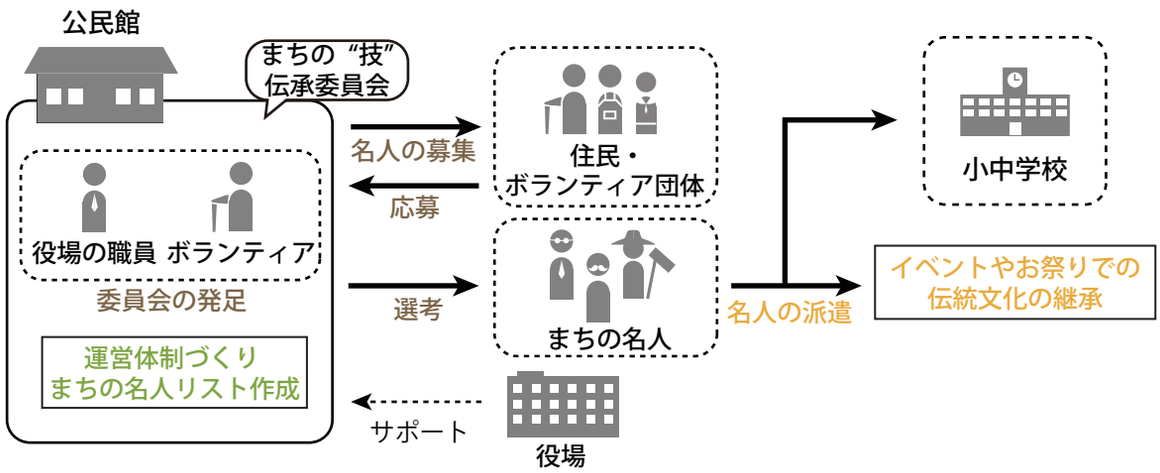
地域における活動

地域における活動

「まちの“技”伝承委員会」は、小・中学校と連携して授業や行事に「まちの名人」を派遣するほか、イベントやお祭りで発表の場を設けることで、地域に伝わる伝統文化を継承させていきます。

加美町には多くの伝統的な技術を持った方がいます。しかし、それらの技術に触れる機会が少ないために、若い世代に伝承されずに埋もれてしまうことが心配されます。この取り組みでは、中新田の住民が先生となり若い世代へ地域に伝わる技術や文化を伝承する活動を行います。

2. 取り組みの体制



伝統的な技術を持った人などで構成する「まちの“技”伝承委員会」を組織します。公民館を活動の拠点とし、町はこの活動をサポートします。

3. その他の地区への応用

case　小野田　宮崎

この取り組みは、地域の区別なく進めることができます。むしろ町内全域での方がまちの名人リストも充実し、伝承活動の場も増え効果的なものとなります。

■ワークショップで出たアイディア

活動の拠点としての中新田公民館

活動の拠点や委員会の場所としては中新田公民館などの既存の公共施設を使うのが望ましいという意見がありました。

小中学校にまちの名人を派遣する

子どものうちから伝統文化を知ってもらうために、小中学校、高校に協力してもらって、授業や課題として扱って欲しいという意見がありました。また、夏休みに「興味のあるまちの名人の家を回る」という課題を出すなど、具体的な提案もありました。

お祭りを発表の場として活用する

地域に伝わる伝統文化をより多くの人に触れてもらうために、虎舞をはじめとしたお祭りなどのイベントで発表できると良いという意見がありました。

● 萌芽期　● 円熟期

シナリオ 11 多世代が集う伝承の場づくり

1. 取り組みの流れ

萌芽期

多世代が集う場の検討

多世代が集う場の検討

各行政区では地域の集会施設である集会所の活用について、集落内の多世代が集う機能を持たせるために、地域の住民で集会所の運営内容について協議します。内容としては、住民が自由に利用できる日や時間帯、管理体制などについてや、多世代が集うイベントの内容や担当者などについても協議します。

成長期

多世代が集う場づくり

集会所の改修

行政区は、ものづくりや食のイベントなど地域の多世代が集うために改修が必要な場合は工事を行います。その際、町は改修費用に対して助成などの支援を行います。

地域住民への周知

行政区は、集会所を自由に利用できる日やイベントの開催情報などについて、住民にチラシなどで定期的に情報発信します。

円熟期

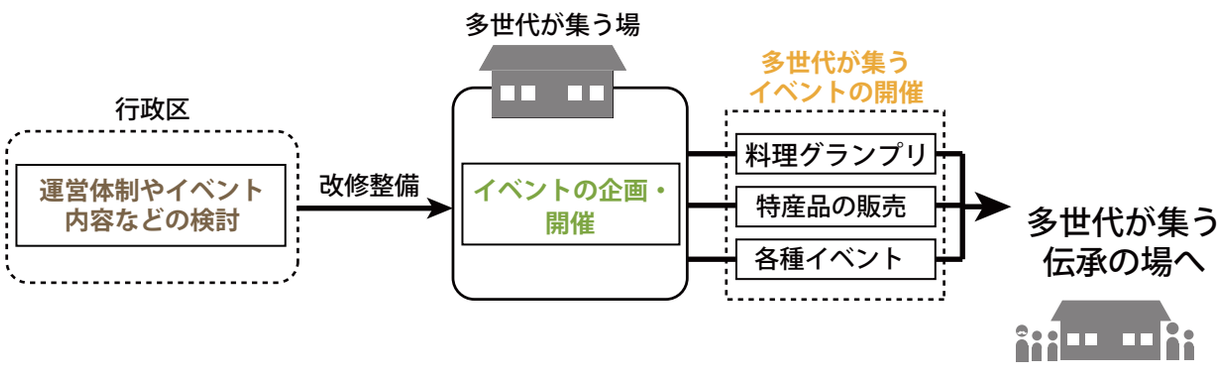
多世代が集うイベントの開催

多世代が集うイベントの開催

集会所では、季節ごとに地域で生産された旬の野菜などの販売や、家庭ごとの旬の野菜のおいしい食べ方の紹介、地域に伝わる伝統文化の披露など様々なイベントを開催します。この機会を通して、親子連れから高齢者まで幅広い世代を巻き込んだ伝承の場とします。

地域では、住民たちが気軽に集まることができる場所が少ないことや、それによる世代間交流の機会が減少しているという課題があります。この取り組みでは、小野田で誰もが自由に利用できる場所をつくるとともに、イベントの開催などで様々な世代をつなぐ拠点をつくります。

2. 取り組みの体制



集会所を所有している行政区において、管理やイベントの企画･実施を担います。イベント開催時には、必要に応じて関係団体の協力も得るようにします。

3. その他の地区への応用

case 01　中新田

中新田は、中心部の行政区では集会所を所有していないので、空き家・空き店舗の活用などで同様の取り組みが考えられます。

case 02　宮崎

宮崎は、同様の取り組みが考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

集会所や公民館でのイベント開催

集会所や公民館の前庭などでは、野菜の販売や昔遊びの会など、誰でも気軽に立ち寄れるような小規模の催し物を開催するとよいのではないかという提案もありました。

河川敷で行われる料理の会

地域で季節ごとに取れる旬の野菜を使ったイベントを開催します。様々な特産品を食べることができるイベントで複数の行政区で連携して実施する場合などは、河川敷付近の公園が良いという意見が出ました。

● 成長期　● 円熟期

シナリオ 12 ペットとともに訪れるまちへ

1. 取り組みの流れ

萌芽期

ペットについて理解を深める

ペットについて理解を深める

地域の飲食店や旅館の経営者、また、ペットを飼っている人を対象に、ペットとの付き合い方に関する研修会を開催します。経営者には躾をされているペットの安全性を、飼い主には躾の必要性などについて理解していただきます。

成長期

ペットを受け入れる体制づくり

ペット受け入れ可能店の登録

地域の飲食店や旅館において、ペット受け入れ可能な店で組織を発足します。受け入れ可能店は、登録制とします。そして、ペット受け入れ店のマップなどを作成します。また、ペットの入店に関するルールなどについても作成します。

ペット受け入れ可能店の準備

ペット受け入れ店ではペット連れお客さん用のスペースの確保やペット受け入れ可能の表示などの環境整備を行うとともに、ペット連れのお客さんへの対応について練習を行います。

円熟期

ペット連れのお客さんの受け入れ

ペット連れのお客さんの受け入れ

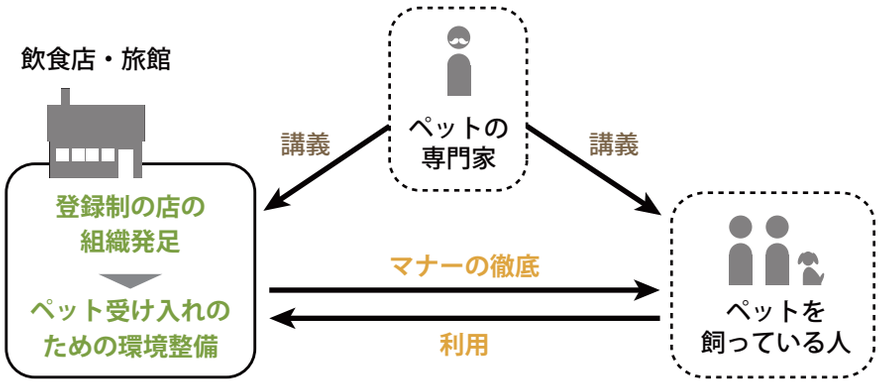
ペット受け入れ可能店では、ペット連れのお客さんをスムーズに受け入れます。

ペット連れのお客さんに対する注意喚起

ペット受け入れ可能店では、ペット連れのお客さんに対して、張り紙などで公園といった公共の場でのマナーなどについて徹底させます。

ペットを飼っている家庭はたくさんあります。その中には、旅行などにペットを連れていけないという悩みを抱えている家庭もあります。この取り組みでは、小野田の飲食店や旅館などにペットを連れ込むことができる体制をつくり、ペットとともに訪れることができるようにします。

2. 取り組みの体制



ペット受け入れ可能な店で組織を発足し、受け入れ体制づくりから始めます。また、飼い主がマナーを守るような注意喚起にも取り組みます。

3. その他の地区への応用

case　　中新田　宮崎

この取り組みは、地域の区別なく進めることができます。

■ワークショップで出たアイディア

ペットに対する誤解を解消したい

お店に連れていくようなペットは、ほとんどがちゃんと躾がされたお利口さんであり、お店や施設の方には、まずそのことを理解してほしいという意見がありました。

お留守番ペットが増えている現状

「旅行に行きたいけれども、ペットを受け入れてくれる場所がないから行けない…」と悩んでいる家族が全国的に多いのでは、という話がありました。もし、ここで加美町がペットと共に泊まれるホテルや、ペットと共に入れるお店ができれば、全国からの観光客が増えることも期待できるのではという意見が出ました。

ペットと共に訪れたいお店

外部からも人が集まる薬莱山周辺を中心として、ペット受け入れ可能にしてほしいという意見が出ました。

● 萌芽期　● 成長期

シナリオ 17 地域を巡るにぎわいづくり

1. 取り組みの流れ

萌芽期

民家解放の仕組みと体制づくり

黄色いハンカチプロジェクト実行委員会の発足

地域からプロジェクトの趣旨に賛同する人を募集し、「黄色いハンカチプロジェクト実行委員会」を発足します。委員会では、民家の軒先に開放の目印として黄色いハンカチを付けることや、開放する空間、公開時間、来訪者への対応などの仕組みについて検討します。

受け入れ体制の整備

各家庭の庭の手入れなどのほかに、ワークショップを開催して各家庭オリジナルの案内看板づくりを行います。また、開放する民家やおすすめのまちあるきコースなどをまとめたマップを作成します。

成長期

情報の発信とイベントの開催

情報の発信

「黄色いハンカチプロジェクト実行委員会」は、チラシやマップの配布、インターネットを活用して情報を発信します。

お試しツアーなどの開催

「黄色いハンカチプロジェクト実行委員会」は、お試しツアーやオープンガーデンなどを開催して来訪者の増加を図ります。

円熟期

まちの顔づくりの検討

自転車のレンタルサービスの実施

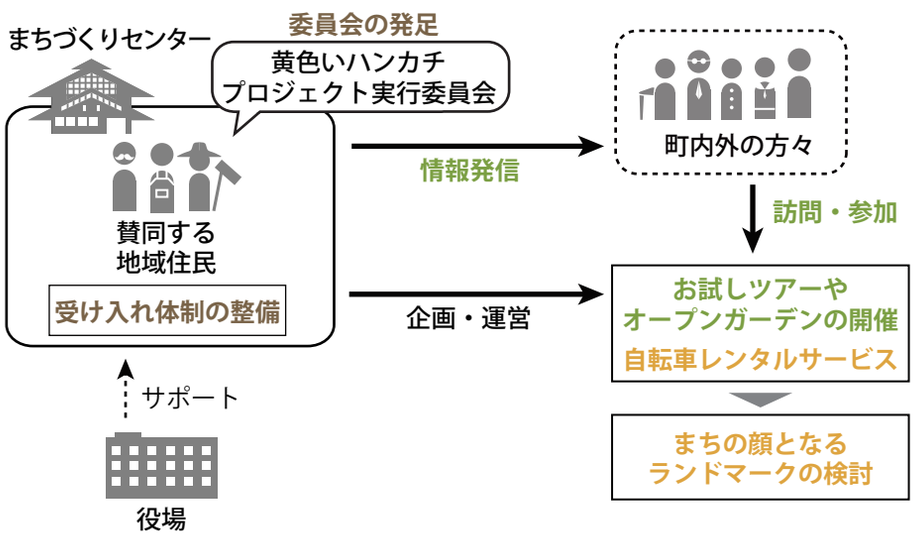
来訪者がまちの中を歩き回れるように、まちづくりセンターを拠点として自転車のレンタルサービスなども実施します。

まちの顔づくり

黄色いハンカチプロジェクトを通して、人々が交流を生み、まちを巡る動きが見えるようになってきたら、まちの顔となるランドマークの整備について検討します。

この取り組みでは、宮崎の民家の手入れされた庭を眺めたり、気軽に立ち寄れる仕組みをつくります。自然に囲まれたまちの中を巡り、住民同士や町外からの来訪者も含めた交流の創出を図ります。おもてなしの心で宮崎の人情を発信し、人々が集うにぎわいをつくります。

2. 取り組みの体制



黄色いハンカチプロジェクトに参加する住民で構成する「黄色いハンカチプロジェクト実行委員会」を組織し、まちづくりセンターを拠点に活動します。町は、活動に必要なサポートをします。

3. その他の地区への応用

case 01　中新田

中新田は、シナリオ１で「まちあるき」や「魅力マップづくり」を行いますが、そういった取り組みと連携すると効果が増すものと考えられます。

case 02　小野田

小野田は、薬莱地区に多くの観光客が訪れているので、その通過地点にあたる商店街で同様の取り組みが考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

誰でも気軽に参加できるものへ

黄色いハンカチを軒先に掲げた民家はプロジェクトの協力者で、民家開放をしている目印になります。自慢の庭を見せても良いし、少しお茶を飲んで会話を楽しむのも良いです。それぞれが出来る範囲で楽しめるプロジェクトにしたいという意見がありました。

黄色いハンカチプロジェクト

まちづくりセンターを情報拠点として、大きな施設や各集会所を巡るための目印をつくります。それをまとめたマップがあると巡る人がわかりやすいという意見がありました。

● 萌芽期

シナリオ18 宮崎文化祭

1. 取り組みの流れ

萌芽期
人材の発掘

委員会の発足
シナリオ５と同様に、町はこの取り組みの趣旨に賛同する住民を募集し委員会を発足します。

ユニークな人材の発掘
委員会は、農業、音楽、芸術、料理、歴史などジャンルを問わず、自分の趣味や特技を活かしたい方を募集します。その際、文化協会や体育協会、各団体にも情報提供を依頼します。

人材バンクへの登録
委員会は、応募や情報提供のあった人を人材バンクへ登録します。

成長期
講座・イベントなどの開催

講座や発表会の企画
委員会は、人材バンクに登録された人が講師となる「学び遊べる講座」を企画します。また、イベントと連携した発表会の開催についても検討します。

講座開催などの情報の発信
委員会は、チラシの配布やインターネットを活用して情報を発信し、受講生を募集します。

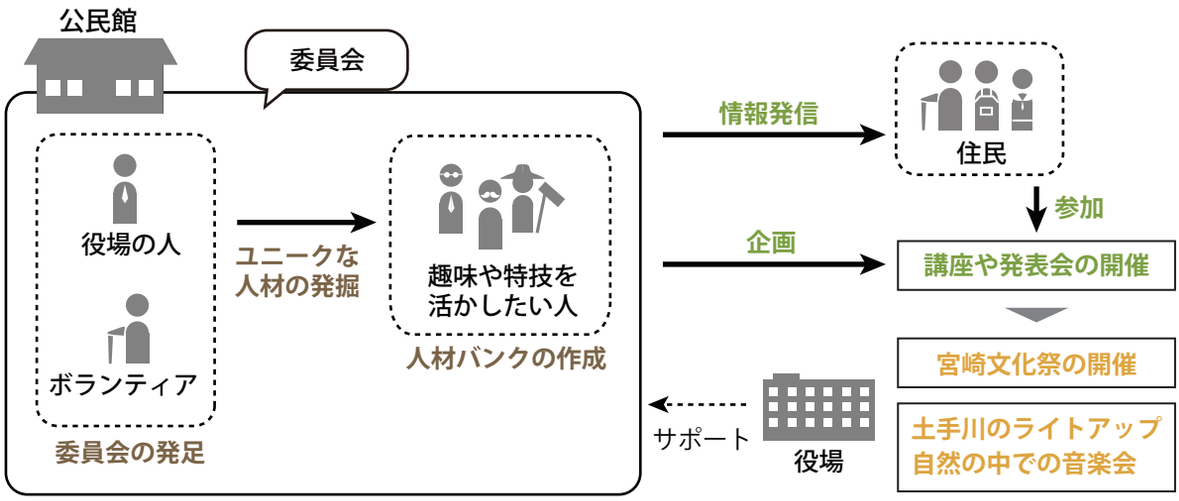
講座などの開催
各分野の知識や技能を活かした講座を開催します。受講生には、最後に修了証や認定証が渡され、その分野の経験者として認められます。

円熟期
宮崎文化祭の開催

宮崎文化祭の開催
日々の成果や発表会の場として宮崎文化祭を開催します。文化祭では宮崎の風土を活かした「土手川のライトアップ」や「自然の中での音楽会」を行い、みんなで楽しみの場をつくりだします。小学校では「子どもたちへ向けた語り部会」が開かれます。

地域には様々な人が住んでおり、人材の宝庫と言えます。この取り組みでは、宮崎で一人ひとりの趣味や特技を活かした勉強会や講座を開催し、他の人と共有し合うことで、暮らしていくうえでの生きがいと楽しみを広げていきます。地域の隠れたユニークな人材を発掘するとともに、誰もが気軽に学び遊べる環境を整えます。

2. 取り組みの体制



自分の趣味や特技を活かしたい人などで構成する委員会を組織します。公民館を活動の拠点とし、町はこの活動をサポートします。

3. その他の地区への応用

case　中新田　小野田

この取り組みは、地域の区別なく進めることができます。中新田では酒造りや音楽に関連する人材が豊かであり、旧鳴瀬小学校（中新田交流センター）を活用することができます。小野田については、薬莱地区に多くの観光客が訪れているので、観光客向けの講座も考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

様々な場所で講座を開催

まちづくりセンターや公民館、スポーツ公園などが会場として挙げられました。充実した公共施設を活用しながら講座を開催します。また、公共施設に限らず、空き家を活用するなど開催場所は限定せず、おもしろい場所を発見していこうという意見がありました。

宮崎文化祭の開催で魅力を発信

「土手川のライトアップ」を開催することで、旧城下町の外堀の魅力や、美しさを発信することに繋がるのではないかという意見がありました。「自然の中の音楽会」では、宮崎の豊かな自然のアピールにもなります。

語り部会の開催

幼稚園や小中学校へ赴き、昔の生活の様子や民話を子どもたちに話します。

● 成長期　● 円熟期

シナリオ 19 空き家を活用した芸術家の拠点づくり

1. 取り組みの流れ

萌芽期

空き家バンク情報の充実化

登録物件の充実

町では空き家バンクを開設していますが、利用者のニーズに合った物件を確保する必要があるため、空き家調査や空き家所有者へ登録の依頼をするなどして、登録物件の充実化を図ります。

関連施策との連携

町は、空き家に移り住んでも、仕事や子育て、医療、地域コミュニティなどの面で不安がないように、関連する施策と連携する体制づくりをします。

成長期

情報の発信と体験の実施

空き家物件の情報発信

物件の所在地や家屋の構造、間取りといった基礎情報に、地図上への表示や外観及び内観の写真を掲載して、物件のイメージが具体化できるようにします。また、公共施設や商店街、病院などへの距離や公共交通機関など、移住希望者に必要と思われる生活情報も掲載して情報発信を行います。

田舎暮らし体験の実施

移住希望者が移住後の生活のイメージをつかめるよう、田舎暮らしの体験ツアーや空き家物件への体験入居などを実施します。

円熟期

芸術家の拠点づくり

芸術家の拠点づくり

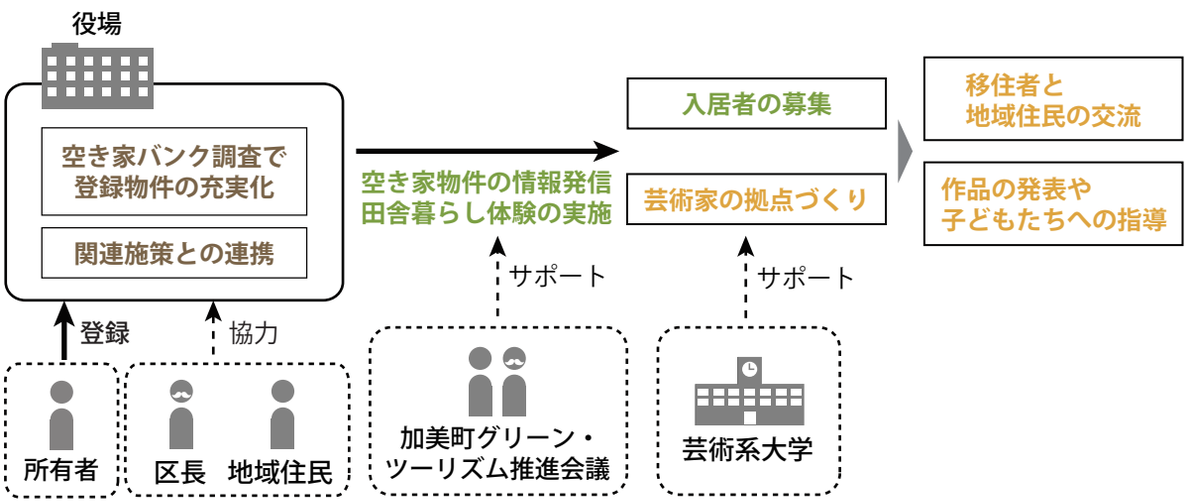
宮崎は陶芸の里であり、自然に囲まれた静かな環境にあることから、空き家を芸術家の活動の拠点としても活用します。

移住後のフォロー

移住者が空き家に住み始めたら、移住者と地域住民との交流の場を設けたりするなど、移住者が地域に早く溶け込めるような支援を行います。また、芸術家については、自分の作品を発表したり子どもたちに指導する場などもつくります。

地域には空き家が増え続けている状況にあります。町では空き家を有効活用して定住促進を図るため、空き家バンクを開設しています。この取り組みでは、宮崎に存在する空き家を活用して移住者を増やしたり、芸術家の拠点づくりを行います。

2. 取り組みの体制



空き家バンクを開設している町が中心となって活動します。空き家調査などでは、区長や地域住民などの協力を得ながら実施します。また、田舎暮らし体験は、農業体験などを実施している加美町グリーン・ツーリズム推進会議などの団体と連携します。芸術家の拠点づくりにおいては、芸術系大学などに協力を求めます。

3. その他の地区への応用

case 01　中新田

中新田は、バッハホールを拠点に音楽活動が盛んであるため、音楽家の拠点づくりとして考えられます。

case 02　小野田

小野田は、薬莱地区に多くの観光客が訪れているので、観光客向けのサービス提供などをしたい人に考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

芸術家の拠点づくり

地域の全体の空き家を把握し、それを魅力ある宮崎の資源にするために、芸術家の活動場所にしたらどうかという意見がありました。

● 円熟期

シナリオ 20 子育て世代の環境づくり

1. 取り組みの流れ

萌芽期

コミュニティサロンの整備

運営体制づくり

町は、子育て世代の中で、雇用の場や人との交流を求めている親を募集します。現在、商店街の中心部にあるまちづくりセンターでは餅料理を提供（もち茶屋）しているため、そこの運営に参加できる体制づくりを行います。

コミュニティサロンの整備

町は、親がまちづくりセンターで働いている間に子どもを預けたり、親同士が気軽に交流できる場として、まちづくりセンターの近くの空き家などを活用して「コミュニティサロン」を整備します。

成長期

食文化の提供とコミュニティサロンの運営

食文化の提供

まちづくりセンター内で、子育て世代による餅料理の提供や物産販売を行います。

コミュニティサロンの運営

コミュニティサロンは、子育て世代が管理・運営を行い、働いている親の子どもを預かります。親は交代で料理を作ったり、子どもたちの面倒を見るようにします。また、遊びに来た親にも面倒を見ていただきます。

円熟期

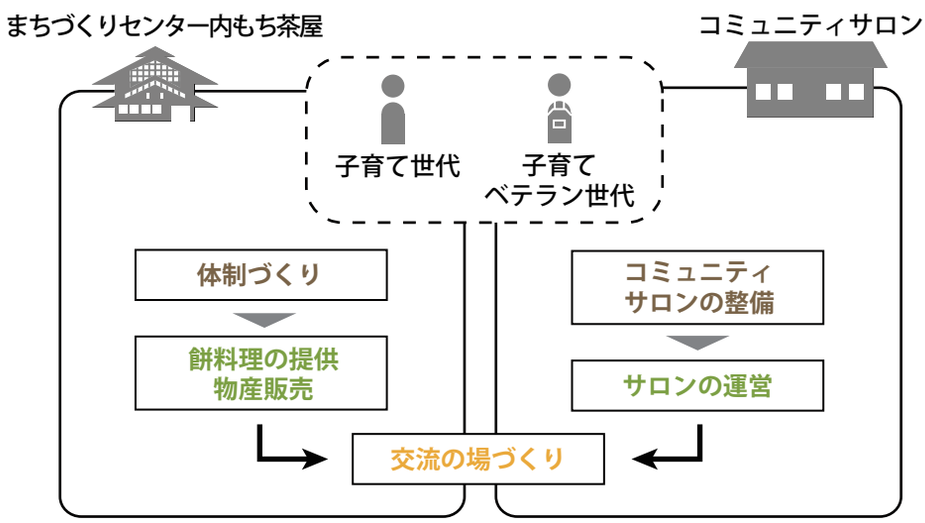
交流の場づくり

交流の場づくり

コミュニティサロンでは、日時を決めて親と子ども全員で交流する場を設けたり、子育ての先輩であり、餅料理などの食文化について指導していただいた方々との交流の場も設け、子育てに関する相談もできるようにします。

子育て世代の人たちの中には、出産を機に会社を辞め、出産後の雇用の場を求めている人もいます。また、子育て世代同士のつながりを求めています。この取り組みでは、宮崎で保存継承されている食文化を子育て世代が受け継ぎ、観光客向けに料理を提供する活動を通じて、雇用の場と子育て世代のつながりをつくります。

2. 取り組みの体制



まちづくりセンター内の餅料理の提供活動は「もち茶屋」が中心となり、そこに子育て世代が加入します。コミュニティサロンは、子育て世代が管理することとし、町は必要な支援を行います。

3. その他の地区への応用

case 01　中新田

中新田は、雇用の場をシナリオ２または４、コミュニティサロンをシナリオ３と連携することで可能と考えられます。

case 02　小野田

小野田は、薬莱地区に観光施設群があるので、そこでの取り組みが考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

まちづくりセンターを拠点に

まちづくりセンターを拠点として活動をしつつ、その近くに「コミュニティサロン」をつくるという提案がありました。

交流の場づくり

「コミュニティサロン」では、子育てだけではなく、食文化を指導するなど交流の場として機能させて欲しいという意見がありました。

● 萌芽期　● 円熟期

自然

・自然とのふれあいづくり
・日曜しぜん探検隊
・四季を体験する自然学校

シナリオ 06 自然とのふれあいづくり

1. 取り組みの流れ

萌芽期

自然との ふれあい イベント開催

自然の中でのイベントの企画

町は、身近にある自然とふれあうことで親しみとその魅力を感じてもらうため、町にいる川魚を見て捕まえて食べてみる「おさかなの日」や田んぼの中で泥だらけになって遊ぶ「みんなで泥まみれの日」といったイベントを企画します。企画するにあたっては、漁協や農協、行政区などから協力をもらい進めます。

自然の中でのイベントの開催

町は、チラシやホームページなどで参加者を募集し、自然とふれあうイベントを実施します。イベントの参加者は、子どもが中心となるように小中学校を中心に周知します。多くの参加者が集まりやすいように、参加費は無料とします。

成長期

自然教育の 体制づくり

自然とふれあえる場所の整備

町は、住民に自然をより身近なものと感じてもらうため、気軽に自然とふれあえる場所を整備します。自然観察をしながら楽しめるように、あゆの里公園ややすらぎの森を活用したり、また農協や農家からの協力をもらいながら、休耕地の田んぼや畑を誰でも遊び場として使用できるようにします。

自然教育のプログラムの検討

町は、子どもたちに自然の豊かさや仕組みを体験しながら自然との共生、環境問題などについて学んでもらうことを目的に、自然教育のプログラムを検討します。プログラムについては、どこで、だれが講師となり、どんな内容を提供できるのかといったことを、森林インストラクターや農協、水辺環境に詳しい団体など多様な団体と連携しながら、企画していきます。また、小中学校の先生からもどんなプログラムが望ましいかを伺いながら、内容を決めていきます。

円熟期

自然教育の 実施

自然教育のプログラムを冊子化

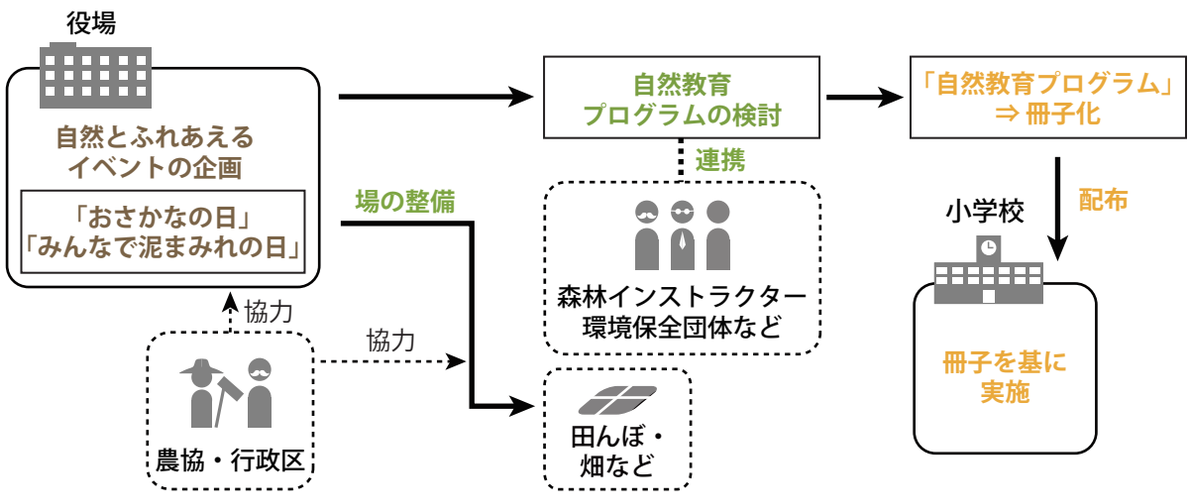
町は、成長期で検討した林業体験や川・田んぼにいる水生生物の自然教育プログラムを、一覧表と詳細という形で冊子としてまとめます。また、自然とふれあえる場所についても、地域の自然情報として地図にポイントし、プログラムと一緒にまとめます。自然教育のプログラム冊子については、各小中学校に配布して積極的に実施してもらいます。

自然教育の実施

各小中学校は、自然教育のプログラム冊子をもとに、自然教育を授業計画に組み込んで、年１～２回実施してもらいます。町は、実施に必要な支援を行います。

自然からは多くのことを学べますが、生活環境の変化に伴って自然との関わりが減ったため、川や山などは荒れてしまい、自然とのふれあいは少なくなっています。この取り組みでは、身近な自然と関わる機会を創出しながら、自然の中で学べる環境づくりを行い、自然教育を実施します。

2. 取り組みの体制



自然とふれあうイベントや自然教育のプログラム冊子作成までは、町が様々な団体と協力しながら進めます。プログラム作成後は、冊子をもとに小中学校が自然教育を実施していきます。

3. その他の地区への応用

case 0 1　小野田

小野田は、薬莱山や荒沢自然館など自然を楽しめる拠点があります。それらを自然教育の場所として活用していくことで、観光客向けのプログラムも考えられます。

case 0 2　宮崎

宮崎は、身近に自然とふれあえる場が多くあるので、同様の取り組みが考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

自然の中で遊べる広場

自然の中で遊べる広場として、カヌー会場がよいという意見も出てきました。

あゆのつかみ取り・釣り大会

あゆの里公園の川辺を利用して、あゆのつかみ取りや釣り大会など川遊びの復活を希望している方が多くみられました。家族で参加できるような仕組みがあると良いとの提案もありました。

使われていない田んぼを利用

里山や、休耕地など使われていない田んぼを使って遊びたいという提案がありました。具体的な場所の候補としては、バッハホールの裏の田んぼなどが提案されました。

● 萌芽期　● 成長期

シナリオ 13 日曜しぜん探検隊

1. 取り組みの流れ

萌芽期

自然を知るセミナーの開催

自然を知るセミナーの開催

町は、小学校のＰＴＡや子ども会育成会を対象に、自然の中で遊ぶ楽しさや大切さ、また危険な場所や行為などを正しく認識してもらうセミナーを実施します。講師としては、行政区やコミュニティ推進協議会、老人クラブなどから自然遊びに詳しい人などを招きます。

成長期

自然遊びの実施

昔自然遊び大会の企画

各小学校区のＰＴＡ・子ども会育成会は、子どもたちを対象に自然を舞台とした遊び、手作りの道具を使った遊びなどを企画します。企画するにあたっては、行政区や老人クラブ、漁協などを交えながら、遊ぶメニューと教える人などを決めていきます。内容については、初めは集会所の敷地や学校の校庭など野外でできるものからスタートし、徐々に自然の中へと舞台を移していきます。

昔自然遊び大会の実施

各小学校区のＰＴＡ・子ども会育成会は、地域の子どもたちを対象に自然を舞台とした遊びを実施します。凧揚げや竹スキー・ソリといった手作りの道具を使った遊びについては、地域のお年寄りなどを先生としながら、作るところから体験してもらいます。

円熟期

子ども主体のクラブによる活動

子ども主体のクラブの発足

各小学校区のＰＴＡ・子ども会育成会は、外で遊ぶ子どもたちを見かけるようになったら、「日曜しぜん探検隊」を発足します。メンバーは、自然の中での遊び、自分たちで道具を作る楽しさを実感して成長した中学生・高校生とします。

子どもから子どもへ伝える活動の企画

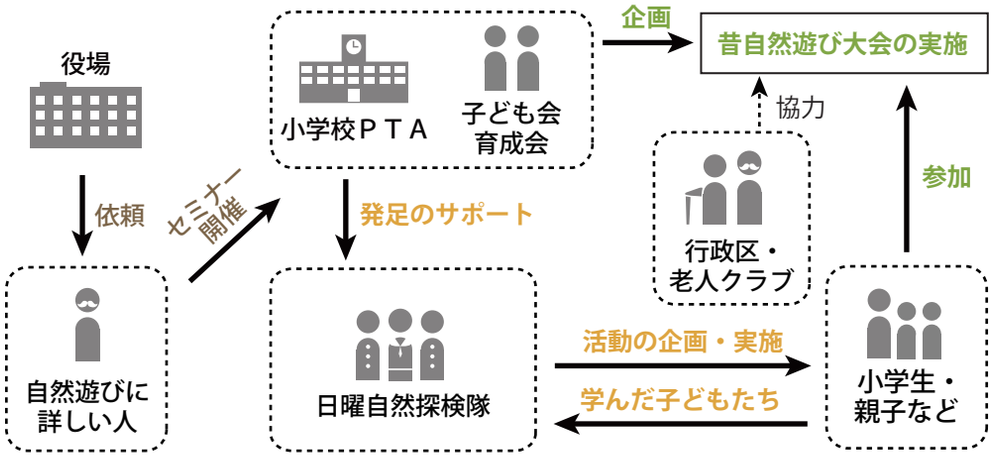
「日曜しぜん探検隊」は、自分たちが自然の中で学んだ遊びや知恵を今度は教える立場として、地域の小学生を対象にイベントを企画します。企画するにあたっては、公民館などを拠点に行政区やＰＴＡ、子ども会育成会といった地域の大人たちと、活動内容や場所、役割分担などを決めていきます。

子どもから子どもへ伝える活動の実施

「日曜しぜん探検隊」は、ＰＴＡや子ども会育成会と連携しながら、参加者を集めてイベントを実施します。地域の大人たちは、必要に応じてアドバイスやサポートをします。

昔は山や川で遊ぶ風景が日常でしたが、今は自然の中で遊ぶ子どもたちの姿をほとんど見なくなりました。この取り組みでは、自然の中で遊ぶ楽しさ・大切さを保護者に知ってもらい、子どもたちに自然を舞台にした遊びを体験させます。そして、子ども主体のクラブを発足し、自然遊びや知恵を子どもたちで伝え合う環境づくりを目指します。

2. 取り組みの体制



成長期までは、小学校のＰＴＡ・子ども会育成会が中心となり、イベントを企画していきます。円熟期で子ども主体のクラブ「日曜しぜん探検隊」が発足したら、このクラブを中心に活動します。

3. その他の地区への応用

case　　中新田　宮崎

この取り組みは、地区の区別なく進めることができます。中新田は、手作り道具の名人など商店街の人材を活かした様々な遊びが考えられます。宮崎については、身近な自然の遊び場が多いため、地域住民が見守り・先生役になって、子どもたちに伝えていくことが考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

親向けのセミナー開催

地域で定期的に行われる話し合いなどと併せてセミナーを行うことで、多くの参加者に講義を行うことができるのでは、という提案がありました。

凧揚げ大会の開催

まずは、学校の校庭を活用して凧揚げ大会をするなど昔の人たちの遊びを教えると良い、という意見が出ました。

大自然をテーマにした遊び

河川敷や森などの自然の中で保護者同伴のもと、自然を活かした遊びや工夫などを学べるという提案がありました。

●萌芽期　●成長期

シナリオ21 四季を体験する自然学校

1. 取り組みの流れ

萌芽期

人材の発掘

組織の発足

町は、自然体験活動の機会を提供するために、取り組みの趣旨に賛同する住民を募集し、「かみ四季自然学校」を組織します。

自然体験活動の名人の募集

「かみ四季自然学校」は、自然の中での遊びに詳しい人や知恵・技をもった人、自然の魅力を教えたい人などを募集します。公民館を拠点として、チラシやホームページで募集するだけでなく、シナリオ１５の「里山暮らしＰＲ委員会」や老人クラブといった各団体にも情報提供を依頼します。

人材の登録

「かみ四季自然学校」は、応募や情報提供のあった人を人材リストに登録します。

成長期

自然体験活動の実施

自然体験活動のプログラムの企画

「かみ四季自然学校」は、人材リストに登録されている人を交えながら、川遊び教室や雪山遊び、虫捕り、山菜採り大会や四季キャンプ体験といった「季節を通して自然の魅力を体験できる」プログラムを企画します。プログラムは、親子でも楽しめるものを企画します。

自然体験活動のプログラムの実施

「かみ四季自然学校」は、小中学校、子ども会育成会と連携しながら、子どもたちの参加を募ります。参加者が集まったら、人材リストに登録されている人を講師として、川や里山などでイベントを実施します。また、町は活動に必要な支援を行います。

円熟期

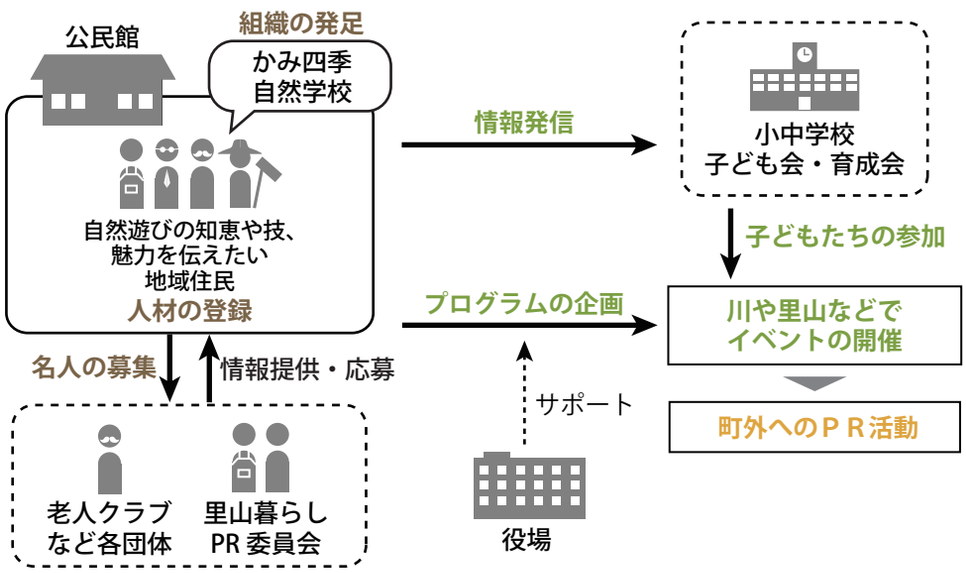
町外へのＰＲ活動

町外へのＰＲ活動

「かみ四季自然学校」は、住民を対象にしたプログラムを継続させながら、町外・都市部の子どもたちを対象にしたプログラムも企画し、参加者を募集します。町は、広報活動を支援します。町外の方々に参加してもらうことで、加美町の自然の魅力を知ってもらい、豊かな自然を発信していきます。

豊かな自然に恵まれた加美町の子どもたちは、昔から自然の中で遊ぶことが当たり前でした。しかし、近年では室内での遊びが増え、川や山などで遊ぶ機会がなくなってしまいました。この取り組みでは、町の子どもたちに自然の魅力を体験する機会を与えるとともに、町外からも参加者を募り、加美町の自然のよさを発信していきます。

2. 取り組みの体制



自然の中での遊びや知恵・技をもった人などで構成する「かみ四季自然学校」を組織します。公民館を活動の拠点とし、町はこの活動をサポートします。

3. その他の地区への応用

case 0 1　中新田

中新田は、あゆの里公園やカヌー場といった河川沿いの施設ややすらぎの森など自然体験として活用できる場がありますので、地域の名人を発掘していくことで、同様の取り組みが考えられます。

case 0 2　小野田

小野田は、薬莱地区に多くの観光客が訪れるので、「薬莱振興公社」が主体となって虫捕り大会や山菜採り大会などを開催するといった自然と観光が一体になった取り組みが考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

四季キャンプ合宿の開催

四季キャンプ体験といった「季節を通して自然の魅力を体験できる」プログラムでは、親子でも楽しめるものを企画したいという意見がありました。

川魚・虫・山菜採り大会の開催

対象範囲は、川や里山、田んぼといった宮崎の自然全体です。各イベントなどの企画・情報発信は、公民館等を拠点として行うという意見がありました。

● 成長期

担い手

・高校生が集うお店作り
・学生発のユニークなＰＲ活動
・人や資源が循環する「贈り物トラック」
・学生を呼び込む田舎暮らし体験

シナリオ07 高校生が集うお店づくり

1. 取り組みの流れ

萌芽期

学生のニーズの把握

学生のニーズの把握

高校生が集う拠点となる店に関して、学生のニーズ把握を行います。多くの利用が見込まれる町内の中新田高校の協力を得て、全生徒にアンケート調査を行います。調査内容としては、学生が集まる拠点の必要性や場所、利用時間帯、拠点での活動内容などについて意見を伺います。

成長期

拠点の整備

拠点の運営方法の検討

アンケート調査で拠点を必要と回答した学生を中心に、拠点の運営プランづくりを行います。プランづくりは、ロングホームルームや放課後の時間を利用し、拠点の場所やデザイン、運営方法などについて検討します。

また、シナリオ４においては、中新田の蔵を拠点とした料理の提供などに取り組むので、放課後の一定の時間帯を学生が運営するといった連携も可能であると考えられますので、その場合はそこの検討に学生も加わります。シナリオ２も同様です。

拠点の整備

町は、学生による検討がされたら、拠点の整備を行います。

円熟期

拠点の運営

拠点の運営

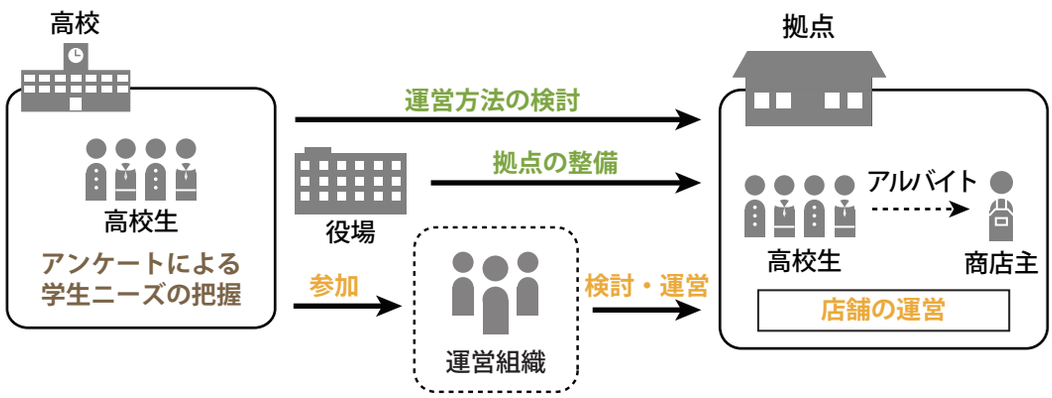
拠点の運営は、シナリオ２または４の組織に担っていただきます。学生は、平日の放課後にアルバイトという形で運営に関わります。また、学生がたむろできるスペースも確保します。

情報発信

高校生や若者が集える場として、他の高校などにも情報発信をしていきます。

地域には若者が気軽に集える場が少ない状況にあります。この取り組みでは、中新田の商店街を中心に高校生自らが企画・運営に関わり、若者の拠点となる場所づくりを行います。

2. 取り組みの体制



拠点の運営は、大人で構成する組織となりますが、高校生も拠点づくりの企画から運営まで関わるようにします。町と高校は必要な支援を行います。

3. その他の地区への応用

case　小野田　宮崎

この取り組みは、放課後の時間帯が中心となるため、高校から公共交通機関を利用しないと移動できない小野田、宮崎では難しいものとなります。

■ワークショップで出たアイディア

高校生の意見を取り入れる

高校生がお店づくりを考える拠点として中新田高校という意見があります。

高校と商店街を結ぶ場所を利用する

高校生がお店の主な利用者となることから、中新田高校と商店街の間がお店の場所にするという意見がありました。そうすることで、町の人と若者の交流場所としての可能性も期待できます。

● 萌芽期　● 円熟期

シナリオ08 学生発のユニークなＰＲ活動

１. 取り組みの流れ

萌芽期

広報部の設置

広報部の設置

ＰＲ活動の中心となる団体を発足します。団体は、町内の中新田高校の協力を得て生徒の中から有志を募り、「加美町広報部」を設置します。広報部は、主に高校またはシナリオ７の店を拠点として取材や広報活動を行います。

成長期

活動内容の検討

活動内容の検討

加美町広報部としてどういった活動をするのか検討します。ＰＲの方法としては広報紙を発行するのか、インターネットを活用するのかなどがあり、そして、情報の内容は食をテーマとするのか、お店とするのか人とするのかなどについて検討する必要があります。また、取材は誰が、いつ、どこで行うのか、広報紙の編集は誰がするのかなどの役割分担についても検討する必要があります。

円熟期

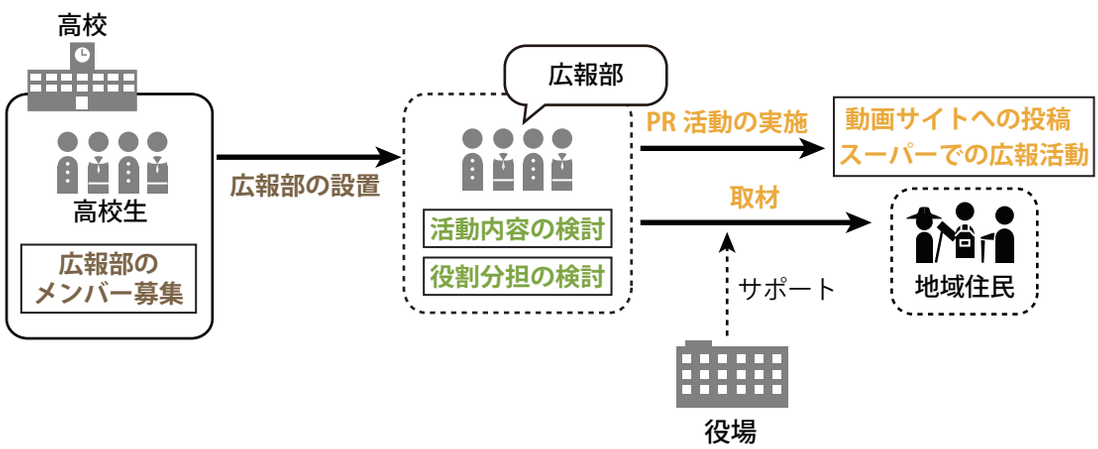
ＰＲ活動の実施

ＰＲ活動の実施

活動内容が決まったら実行に移ります。町外にも魅力を発信するためにインターネットの動画サイトへ投稿したり、スーパーのレジ袋に広報紙を入れるなど、今までになかったようなユニークな方法でまちの魅力を発信します。他のシナリオにある「まちあるき」や「加工体験」などに参加して、その内容を伝えたり、シナリオ９の「まちのなりわい発信局」との連携も考えられます。町は活動に必要な支援を行います。

まちの魅力を発掘・発信し、多くの人に知ってもらうため、若者による加美町の魅力の発掘・発信を行います。この取り組みでは、若者が読んで楽しめる広報紙や「かみ～ご」の動画作成など、ユニークな方法を通して町内外に魅力の発信を行います。

2. 取り組みの体制



中新田高校の生徒からなる「加美町広報部」を中心に活動します。取材や広報紙などの配布については、地域住民の方の理解と協力も必要となります。町と高校は必要な支援を行います。

3. その他の地区への応用

case　小野田　宮崎

小野田、宮崎では、取り組みの主体を小・中学生に置き換えて、広報クラブとして活動するといった形で応用できます。その場合は、編集や情報の発信作業などを大人が支援していくことが必要となります。また、シナリオ９の「まちのなりわい発信局」などへ参加することも考えられます。

■ワークショップで出たアイディア

中新田高校をＰＲ活動の拠点に

活動の主体は、中新田高校の生徒からなる「加美町広報部」です。活動の拠点としては中新田高校が良いという意見が出ました。

加美町全域へと活動を拡げる

いずれは、住民の方々への取材を加美町全体に広められると良いという意見がありました。

● 萌芽期　● 円熟期

シナリオ 14 人や資源が循環する「贈り物トラック」

1. 取り組みの流れ

萌芽期

組織の発足と運行内容の検討

組織の発足

贈り物トラックを運行する組織を発足します。さんちゃん会であれば、運営している「やくらい土産センター」に町内の農林産物や加工品などが集まるため、スムーズな運行が期待できます。

運行内容の検討

トラックに積む商品の内容や運行ルートと販売場所、時間帯など、運行に必要な事項について検討します。トラックに積む商品は、運行組織で扱うものだけでなく、小野田の商店の商品なども可能にすると、商品にも幅が広がり効果的です。

成長期

贈り物トラックの運行

商品の集荷

トラックの運行日､販売者は決められた時間まで拠点に商品を持ち込みます。

商品の販売

トラックは、公共施設や集会所などを巡回して販売します。贈り物トラックの運行は、事前に運行日時と販売場所、販売商品などをチラシやインターネットなどで周知しておきます。また、農産物については、旬なものを取り扱います。

円熟期

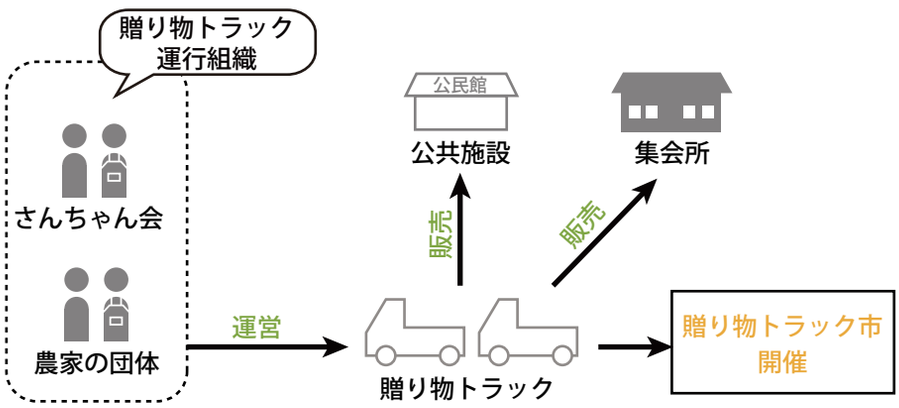
トラック市の開催

トラック市の開催

贈り物トラックは、トラックに積んだまま販売できるので、様々なイベントにも駐車スペースさえ確保できれば出張販売します。また、たくさんの贈り物トラックが集まり、様々な商品を販売するトラック市も開催します。

加美町での生活には自家用車は必要不可欠であり、高齢者や学生などは住民バスなどの公共交通を利用しなければなりません。この取り組みでは、小野田において、人が動くのではなく地域の農林産物や加工品などが循環する「贈り物トラック」を運行させます。

2. 取り組みの体制



さんちゃん会や農家による団体などが中心となり活動します。販売する商品については、地域の商店街などの協力も得ながら取り組みます。

3. その他の地区への応用

case　　中新田　宮崎

この取り組みは、地域の区別なく進めることができます。トラックの運行台数の確保や各地域への集荷拠点の確保、各地域の商品のトラックへの積み替え等が効率的に行えれば、町内の様々な商品が簡単に届けられることになります。

■ワークショップで出たアイディア

話し合いの拠点

話し合いの場は、多くの人たちが利用する小野田公民館が良いという意見がありました。「さんちゃん会」の協力があるとスムーズな運行が期待ができます。

贈り物トラック市の開催

対象範囲は小野田の全域で、国道などの主要な道路を巡るといいという意見がありました。また、数台のトラックが停車する場合は、駐車場が多い場所に止め、そこで市場のようなものが開催できるというアイディアもありました。

● 萌芽期　● 円熟期

シナリオ22 学生を呼び込む田舎暮らし体験

1. 取り組みの流れ

萌芽期

学生の募集とインターン

学生の募集

町は、地域づくりインターン事業として、都市部の「農業」、「里山」、「田舎」に興味を持つ学生を募集します。

研修の受け入れ

学生は、加美町に２～４週間滞在し、宮崎で農林業体験や陶芸体験、地域おこし協力隊とともに産業やまちづくりなどを体験します。最終日には、活動報告会で体験内容や感想などを発表していただきます。

成長期

リピーターづくり

リピーターづくり

インターン終了後は、学生に休み期間を利用して、農作業のお手伝いやイベントへ参加していただきます。インターン中に時期的にできなかったことなどを体験し、さらに地域の良さを理解していただきます。

円熟期

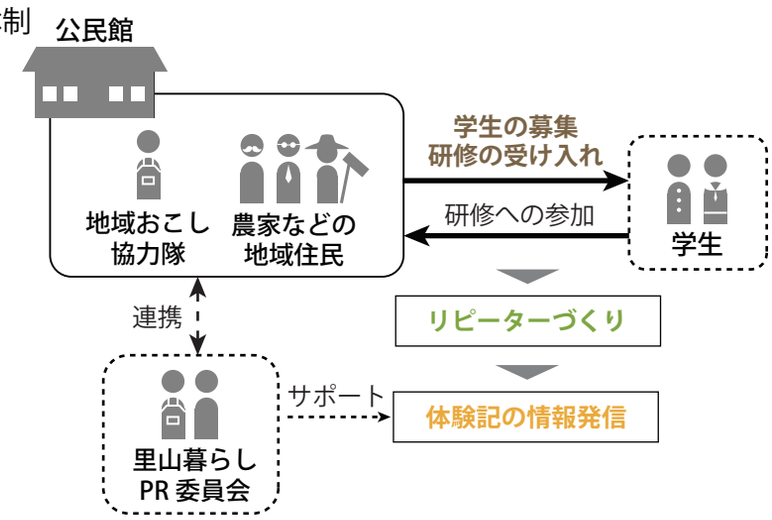
体験記の情報発信

体験記の情報発信

インターンを通じて宮崎の楽しいところや面白いところ、きれいなところなど、学生が発見したことを「体験記」としてインターネットなどで情報発信していただきます。また、シナリオ１５の「里山暮らし PR 委員会」と連携した活動も効果的です。

まちの魅力を都市部の学生に体験してもらうことで理解していただき、その魅力を学生に発信していただきます。この取り組みでは、宮崎において農業体験等を研修内容としたインターンで学生を受け入れ、学生から地域の魅力情報を発信していただきます。

2. 取り組みの体制



インターン事業は町が中心となって活動します。研修における農業体験などは農家の協力をいただきながら実施します。

3. その他の地区への応用

case 0 1　中新田

中新田は、酒造りや様々な商店があり、音楽活動も盛んです。宿泊が可能な中新田交流センターを拠点にできますが、移動には関係者の協力が必要になります。

case 0 2　小野田

小野田は、農業の他に薬莱地区に観光施設群があります。そこの宿泊施設を拠点にできますが、移動には関係者の協力が必要になります。

■ワークショップで出たアイディア

活動拠点としての宮崎公民館

学生は宮崎公民館を活動拠点としますが、地域内の移動は受け入れ農家や地域おこし協力隊などの協力が必要となるという意見がありました。

田代キャンプ場の活用

キャンプ施設は現存しているものの利用が少ないことを受けて、学生のキャンプ地として活用するという意見がありました。

里の風景の視点場

写真撮影を通して、山の風景をホームページやSNS等で宣伝することによって、キャンプ場・ゆ～らんどの利用を促すという意見がありました。

● 萌芽期　● 成長期　● 円熟期

～加美町協働の景観まちづくりプラン作成の経緯～

1 加美町美しいまちなみづくり検討委員会

加美町景観計画を策定するために、加美町が目指す「美しいまちなみ」の方向性や、その目指すべき姿へ向けての取り組み等について意見及び提言を行いました。

- 設立日：平成２５年１０月２５日
- 委員人数：１２名（学職経験者、公募による住民等）
- 開催数：８回

開催状況

回	開　催　日	内　　容
第１回	平成２５年１０月２５日	■ 加美町美しいまちなみづくり１００年運動と美しいまちなみづくり検討委員会について ■ 加美町の景観に関する調査について ■ 加美町らしい景観形成に向けて
第２回	平成２５年１２月１３日	■ 景観まちづくり町民ワークショップの開催報告 ■ まちづくりにおける主題と具体的な方針 ■ 景観計画における基本的な方針について
第３回	平成２６年３月３日	■ 景観計画の基本方針（案）について
第４回	平成２６年４月３０日	■ 景観調査の結果のまとめ ■ 今年度のスケジュールについて ■ 景観まちづくりのプラットフォーム
第５回	平成２６年６月２７日	■ 第一回ワークショップの成果報告と分析 ■ 第二回ワークショップの実施内容について ■ 検討委員会の今後の位置付け
第６回	平成２６年８月１日	■ 第二回ワークショップの成果報告と分析 ■ 第三回ワークショップの実施内容について ■ 加美町景観基本計画とまちづくりブックの方針
第７回	平成２６年１０月３日	■ 第三回ワークショップの成果報告 ■ 加美町景観基本計画の内容について
第８回	平成２７年３月１８日	■ 加美町協働の景観まちづくりプラン（案）について

2 地域資源調査等

まちづくりオーラルヒストリー調査

- 実施時期：平成２４年９月１７日～２３日（７日間）
- 調査人数：住民１００名（各種団体の長や区長、農業、商業者など）
- 調査内容：住民から口伝えの思い出や記憶を採集し、それを多数集めて生活史として編纂するために、昔の生活や生業等についてヒアリング調査を実施しました。

加美町らしいいね！ワークショップ～加美町らしい景観の発見と共有～

- 開催日：平成２４年１２月８日
- 参加人数：３３名
- 実施内容

《第一部》オーラルヒストリー調査報告会（個人史から抽出した加美町の魅力を発信・共有）

・調査した生活史を６つのテーマに分けて、エピソードを紹介し参加者で共有しました。

《第二部》「加美町らしいいね！」ワークショップ（地域資源の再認識と新たな魅力の発見）

・調査して得た３００以上の生活史エピソードや写真を町の地図に落として話し合うことで、過去の知恵や共感できる思い出を読み取り、加美町の新たな魅力を発見・共有しました。

「加美町記憶の口述史」の発行

- 発行日：平成２５年１０月２５日
- 内容

オーラルヒストリー調査で得られたエピソードを「暮らし」「なりわい」「自然」の３分野に分けて、年代ごと（昭和前期～平成）に編集した冊子を作成しました。

また、「加美町記憶の口述史」の内容を８つの分野に区分し、わかりやすくまとめた年表も併せて作成しました。

- 配布先：オーラルヒストリー調査協力者（１００名）、町内小学校（１０小学校）、町内中学校（３中学校）、図書館（３施設）、公民館（９施設）、希望者　等

景観調査

- 実施時期

商店街調査：平成２５年７月１３日～１４日（２日間）、

小学校区調査：平成２５年９月１６日～２０日（５日間）

- 調査内容

平成２４年度に実施したオーラルヒストリー調査及びワークショップから抽出したエピソードをもとに、目に見える物理的な特徴を集めるために、早稲田大学生（よそもの･わかもの）の視点で広域的な景観資源調査を「商店街」「小学校区」の２回に分けて実施しました。

この調査では、将来的なまちづくり活動、地域コミュニティの拠点として小学校を重要な場所と位置付け、「集落の形態、集落の拠点、生活景」といった３つの統一した軸を設けて、地域遺伝子（地域資源、歴史資源、景観資源など）を探りました。

まちなみ再発見ツアーワークショップ

- 開催日：平成２５年１１月１７日
- 参加人数：１２名
- 実施内容

　早稲田大学後藤研究室が景観調査で得た客観的な情報･特徴について、住民に「価値づけ」をしていただきました。調査で分析した特徴を各地域１１枚のパネルに「タカの目」「ツバメの目」「ヒトの目」「ネコの目」という４つの視野ごとにまとめ、「加美町らしい・いい」と思うものに投票（価値づけ）して、その結果を基に話し合いました。

- その他

　ワークショップで使用した「加美町景観調査パネル」をより多くの住民や子供たちに見てもらい、自分たちの住むまちを改めて知ってもらうために、町内施設や中学校に展示しました。（住民バスセンター、中新田図書館、３地区中学校へ展示）

わたしたちのまちの明日を描く三回連続のワークショップ

　これまでの地域資源調査で得た加美町の情報を基に、３回にわたるワークショップで問題・課題・魅力を整理して、それらを踏まえながら、どのようなまちを描けるのかを話し合いました。

実施内容

回	開　催　日	人数	内　　容
第１回	平成２６年６月７日	２４名	テーマ：「まちの課題を共有し、取り組むことを考える」 まちに生まれてから歳を重ねていく様子をみんなで想像しながら、まちの身近な問題を出し合って分類し、地域ごとに整理した。
第２回	平成２６年６月３０日	２５名	テーマ：「まちづくりの取り組みの全体像を描く」 どんな課題にどのように取り組むことで解決できるのかというアイディアを出し合いました。これらのグループに分けて整理し、中新田・小野田・宮崎それぞれのまちづくりの取り組みを体系化していきました。
第３回	平成２６年８月２日	２２名	テーマ：「実現するための具体的内容を考える」 「いつ？」「誰が？」「どこで？」「どのように？」を考え、アイディアを地図に示していくことで、取り組みを実現していくための段取りを練りました。

3 啓発活動

地域資源調査の内容やワークショップの報告といった計画の策定過程の情報を住民のみなさんに伝えるために、「加美町景観だより」を随時発行しました。

- 配布先：町内全戸に配布、加美町公式ホームページに掲載

回	発　行　日	内　　容
創刊号	平成２４年１１月２０日	■ 景観とは ■ まちづくりオーラルヒストリー調査の実施報告 ■ 啓発イベントの開催周知
第２号	平成２５年２月１日	■「加美町らしいいね！ワークショップ」の開催報告 ■ 加美町らしい景観形成に必要なオーラルヒストリー
第３号	平成２５年１０月１８日	■「加美町記憶の口述史」の発行 ■ 景観調査の概要を説明 ■ 景観計画の検討体制の説明 ■ 第１回検討委員会及びワークショップ開催の案内
第４号	平成２６年１月３１日	■「まちなみ再発見ツアーワークショップ」の開催報告 ■ 景観調査の成果をまとめたパネル展示について ■ 景観計画の策定状況及び第３回検討委員会開催の周知
第５号	平成２６年６月２日	■「わたしたちのまちの明日を描くワークショップ」の開催周知
第６号	平成２６年１２月２５日	■「わたしたちのまちの明日を描くワークショップ」の開催報告

4 加美町協働の景観まちづくりプラン（素案）に対する意見

パブリックコメント

- 実施期間：平成２７年２月１３日（金）から３月１６日（月）まで（３２日間）
- 公募の方法：加美町ホームページに掲載、協働のまちづくり推進課における閲覧
  小野田支所、宮崎支所における閲覧
- 対象：加美町住民
- 意見提出数：０件

試読会

- 開催日：平成２７年２月２７日（金）
- 参加者：住民９名
- 実施内容：住民にとって読みやすく分かりやすい計画書とするため、言葉や図、写真などの分かりやすさに対して意見をいただきました。

加美町協働の景観まちづくりプラン

平成２７年３月発行

発行／宮城県加美町
〒９８１－４２９２　宮城県加美郡加美町字西田三番５番地
ＴＥＬ ０２２９－６３－３２１５　ＦＡＸ ０２２９－６３－２０３７
ホームページ／ http://www.town.kami.miyagi.jp/
Ｅ－ｍａｉｌ／ kyodo-matidukuri@town.kami.miyagi.jp
編集／加美町協働のまちづくり推進課
協力／早稲田大学後藤春彦研究室